Z32-B88

# 金の船

監修　馬生島友　村藤崎島

弐月号

第弐號　第四卷

国立国会図書館
8. 3. 26

西條八十氏著

◇最新刊◇

# 詩集空の羊

四六版舶來上質紙製

裝幀・初山滋氏

定價七拾錢也

私のこれまでに知つた最も情熱的な、また最も清純な女性○○子さんに送つたと言ふ抒情詩『空の羊』を始め『パステル』『蠟人形』『胸の上の孔雀』『顔の海』等すべて八篇先生自ら選んだ先生の豐かな藝術そのものが『空の羊』一卷である

『パステル』と『蠟人形』は大正七年三月の作で、いづれも當時自分にさつてあまりに苦悩であり荒蕪であつた現實生活を回避するため昏さ描いた眞實の美しい夢であつた。これらの作は藝術が自分によつて人生からの遁逃を意味してゐた或時代の忘れ難い記念である。『胸の上の孔雀』は大正八年四月の作で『胸の上の孔雀』は肉神の疲勞に伴ふ靈性の捲曳を記して眞かふと企てたものである。『顔の海』には幻想に生きる私自身と同時にその幻想の傍觀者である私の姿とが並立して描かれて居る。この二篇の作は不思議にも若い日のロマンティシズムを脱した私の面前に展かれた儘である――ミスティシズムとリアリズムとの岐路を示してゐる。そして今もなほ展かれた儘である――ミスティシズムとリアリズムとの岐路を示してゐる。そうして先生は言はれる生を藝術に求むる人の必ず持つべきの書は『空の羊』一卷である。

東京市牛込區早稲田大學前　電話番町一二九八番　振替東京一五五番　稲門堂書店

# 現代童話選集

◆現代童話の粹を集め精を凝せる一卷◆

秋田雨雀　芥川龍之介　宇野浩二　江口渙　小川未明　菊地寛　久米正雄　久保田萬太郎　小島政二郎　佐藤春夫
白鳥省吾　中村星湖　秋庭俊彦　江口千代子　濱田廣介　福士幸次郎　福田正夫　百田宗治　山村暮鳥　吉田絃二郎　井上康文

現文壇に於いて童話に筆を執る小說家、詩人二十三大家の作、收むる所二十六篇、悉く寶玉にも比すべき名作眞に藝術的童話の精髓をなす。兒童讀書界に一大曙光を與ふるものなり。地上樂園としての童話時代に住む美しき反映、又懷しき搖籃の追慕として、この集は人生に與へられたる永遠の光である。愛しくも又美しきわが子の唯一の友として如何なる家庭にも必須なものであると共に、勉學の餘暇に兒童の樂しむ絶好の書である。

四六判　大刷　六色　武井武雄　定價金二圓二十錢　百頁　四色挿畫　四色繪　金葉　天鵝絨　帙　裝幀　繪口　函入　美本　繪口　稅八錢

◈星の子供

百田宗治先生著

童謠・童話集

美しい表紙・口繪原色刷・挿畫數葉・可愛しい本です。

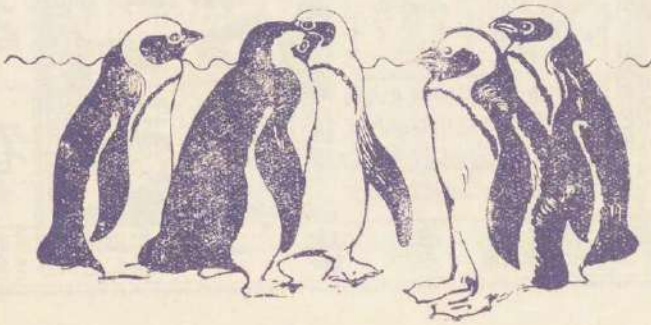
乙部孝・武井武雄兩先生の畫

定價壹圓廿錢・郵稅八錢

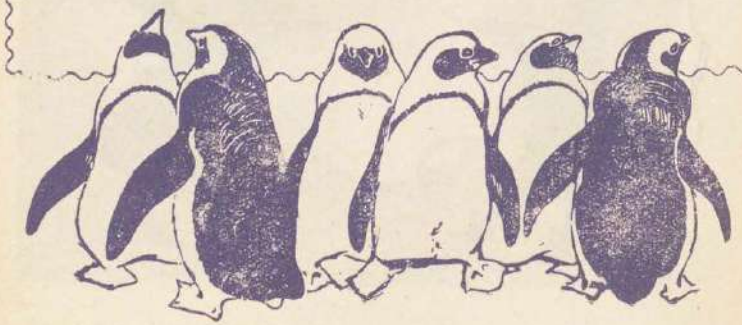
東京市外高田町　電話番町四九一五　振替東京一五七
東京市司ヶ谷四七二番地　一歩堂

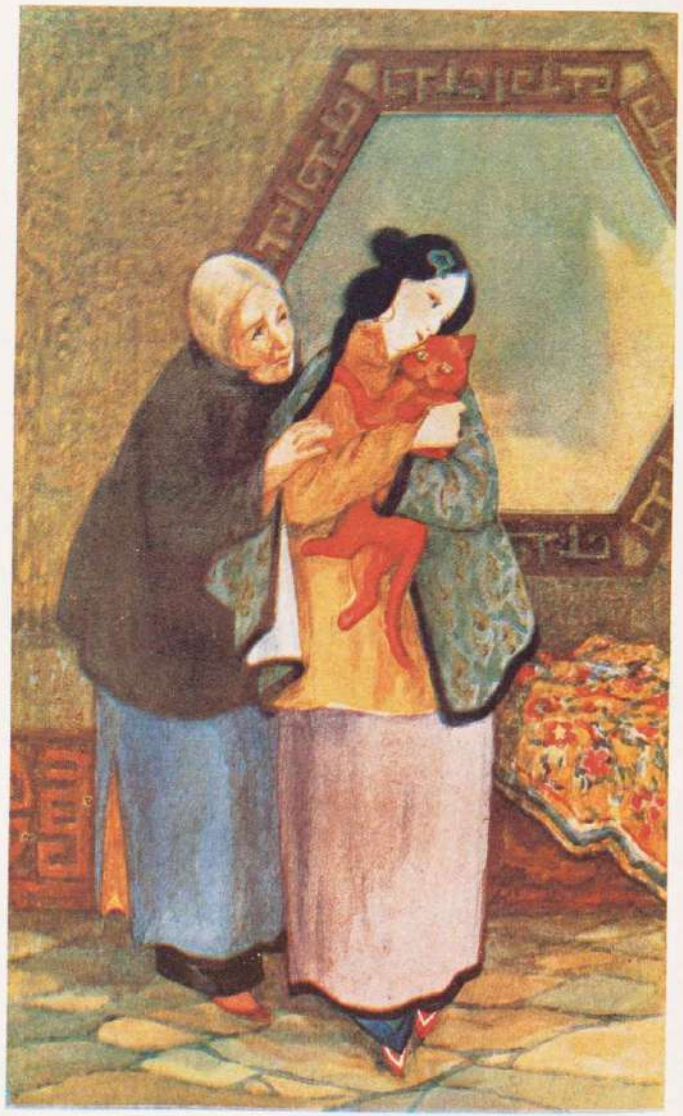
## 目次


スキ ―（表紙、原色版）
貴婦人と赤猫（口繪、三色版）……岡本歸一
雀の子供（曲譜、童謡）……一……本居長世
野口雨情
不思議な蘭（童話）……四……西條八十
銀の鞠（童話）……一〇……宮島資夫
小さな男（雀ばなし）……一六……岡本歸一
赤猫の話（童話）……二〇……沖野岩三郎
ニヤン吉とワン三郎（童話）……二七……梅田龍子
流罪になる迄の賴朝（史譚）……三六……窪田空穗
眠りの國（童謡）……三三……内藤豐雄
ヂックの出世（童話）……三六……山本作次
天の破片（童小劇）……四〇……中島孤島
お菊池物語（傳說）……四六……藤澤衛彦
歌娘（童話）……五〇……霜田史光
草の實（推薦童謡）……五七……湯木ますみ
村の鎭守樣（童話）……五六……齋藤佐次郎
栗の木から聞いた話（推薦童話）……六六……十橋カ
和莊兵衛の夢（童話）……七〇……楠山正雄
家なき子（名作童話）……八二……三宅房子
冬の風鈴（春話）……八六……百田宗治
通信……九〇……編輯部
『金の船童話講演部新設』……西
（附錄）
長篇物語 父戀し……沖野岩三郎







## 貴婦人と赤猫

＝岡本歸一畫

『お婆さん、この猫を二千圓で賣て下さい。』と貴婦人が賴むと、お婆さんは難しい顔をして、『いゝえ、二千圓には賣りません。』と、いひました。

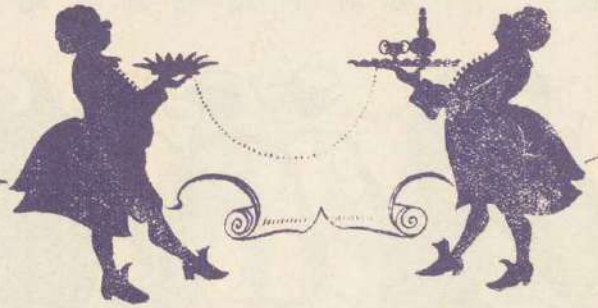
『では三千圓に賣つて下さいまし。』

『三千圓でも賣りません。』

『どうしても賣つて下さいませんか。私は今日は三千圓しかお金を持つてゐません。』

貴婦人は殘念さうに、さういひました。

（「赤猫の話」の二十五頁を御覽下さい。）



# 童謡作法問答

忽好評

野口雨情先生著

童謡を讀み、童謡を作らむとする諸君は是非本書を御覽なさい。童謡作法の全般が一目にしかも精細に判ります

新らしい童謡の研究書
新らしい童謡の作り方」として本書は目ざましく生れたり。

内容

●童謡の作り方と質問
●童謡とはいつたい何にか
●童謡は誰れでも作れるか
●童謡と唱歌との相違
●童謡と詩との相違
●童謡と民謡との相違
●童謡と小曲との相違
●童謡と民衆詩の相違
●空想の童謡と聯想の童謡
●童謡は長短何れが宜しいか
●童謡は讀べきか歌ふべきものか
●童謡にはどんな言葉を使ふか
●童謡を作る時の心得
●童謡は調子(韻律)が第一
●佳い童謡を作る方法
●後世まで殘る童謡
●童謡と作曲及作曲家
●童謡を書いてゐる人々

上製約三百頁
實價金壹圓
送料金十錢

抒情詩名作叢書第三編 民謡詩集 別後 (第五版) 定價九十錢 送料十錢

台覽の光榮ある文部省認定童謡集 十五夜お月さん 定價一圓廿錢 送料十錢

尚文堂 東京市神田區南神保町四三九 振替東京一四四番

# 自由画教育

山本鼎氏著 ◇小學生畫◇

□畫原色版十八葉 別刷十葉 定價參圓五拾錢 送料拾六錢

深霧の中に迷ふ如き我教育界突然烈風し如き現實は伯の新人地山本鼎氏の體驗より生れ教育革新の主張正に之!

◇附錄◇『手工教育と産業美術』

——私の、圖畫教育界へ投げた小石は日本中へ波紋を描きました。私にまじめな意志で小石を投げましたが、波紋は浮氣に擴がつたやうにも見えました、しかし『自由畫教育は教育的價値のない物だ』と云ふ貶者の罵聲が此教育の古くから新な信奉者達の經驗によりて實行者や、蒲快です。とは言へ、いつにより實行にゆくのは、漸次に打ち伏せられてゆくなつたら、大多數に吾々の信條が理解されるのでせう。圖畫手工教育が、美術教育として安定し、且つ充實し、人間性の血となるやうな有機的な教育に到達するやうにと祈願する、それ故、自由畫教育に就いて、私に直接な關係のあつ事は、殆んど、此本には、農民美術もしくは産業美術に關するなごりなく採錄しました。自由教育と同じ思想に基いて、記事を附錄としました。其事が、自由教育下の、そして偶々同時に唱へられはじめたからであります。自由畫教育下の成蹟を語り、豫て、此書の卷頭を飾つてくれた小學生諸君の繪は、即ち、此教育の教育的價値の一端を鮮かに實證するものであります。

著者序——

四六版 箱入持製美本

東京市神田區 仲町猿楽町拾五 スルア


きがはるぎしお

毎月一回發行
原色版四辺刷四枚一組
定價 二十五錢
送料 二錢

◆「金の船」愛讀者のみな様からも、お姉さまお兄さまからも、學校の先生からも御賛成下さいまして澤山な御申込みを受けました。

◆「金の船」誌友の東京一愛讀者から二百部と「少女界」愛讀者の『界ちやん會』と申します會からは一百組も御註文を下さいました。

◆第一輯は一月の廿日頃出來ます。御申込みの時御住所と御名前をはつきり書いて下さい。代金は小爲替で願ひます御面倒でせうが。

◆きつと喜んでいたゞけると信じます。どうぞ澤山ためて私の畫集をこしらへて下さいませ。委しい事は正月號の廣告を御覽下さい。

東京市四谷區船町拾壹 岡本歸一

寶塚少女歌劇レコード

久しく一般に渇望されてをりました寶塚少女歌劇を今回當社に於て吹込み左の通り賣出しました。

歌劇のレコードは從來もありましたがそれは一人か二人、多くて數人に過ぎませんでした。今度のはコーラス廿五人、それに歌と共にオーケストラを入れてある所に本社の新しい試みと努力とがあります。

初春の御家庭にふさはしい賑やかな面白いレコードです。

口眠りの女神
口忍ぶ草
口鄙鄙

外にお正月向きのレコード豐富に賣出されてをります。

鶯印レコードの特色、發音の明晰と耐久力の大なること

株式會社 日本畜音器商會

## 最新刊音樂書

野口雨情先生作歌
本居・中山兩先生作曲

### 故郷の唄

一冊 二十錢 送料二錢

〔附〕旅人の唄

故郷の唄は、慶應大學競走部應援歌として本居長世先生が作曲された有名な曲ですが昨今流行歌として青年男女學生間に歌はれてをります。又旅人の唄は、中山晉平先生が快心の曲でして殊に女學生向に歌はれてをります。

野口雨情先生作歌
中山晉平先生作曲

### 新童謠樂譜(1) ポチの學校

一冊 三十錢 送料二錢

ポチの學校には、螢の提灯、お山の鳥、花咲爺、鶯、赤牛黑牛の六つの歌がのつてあります。幼稚園から小學校の生徒さん達が、唱歌の代りに歌はれるやうに、皆なやさしい譜が付いてをります。

新童謠樂譜(2) 居眠り人形(續刊)

◆好評音樂書◆

本居長世先生作曲

### 新民謠

一冊 三十錢づつ 送料二錢

(1) さすらひの風の歌 三木露風先生作歌
(2) 夕潮 伊藤小四郎先生作歌
(3) 豐作歌 野口雨情先生作歌
(4) 別後 同
(5) 關の夕ざれ 古謠
(6) 白月 三木露風先生作歌
(7) 咲いた櫻 古謠
(8) 砧の音 野口雨情先生作歌

佐々紅華先生作歌作曲

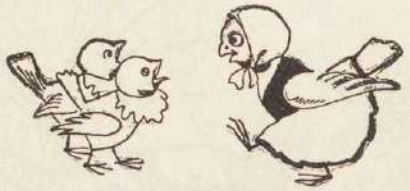
### 童話唱歌

一冊 二十錢づつ 送料二錢

(1) はだか虫
(2) 牧場の兎
(3) 青い鳥
(4) 鋤と鍬
(5) 茶目子の一日
(6) 毬ちゃんの繪本

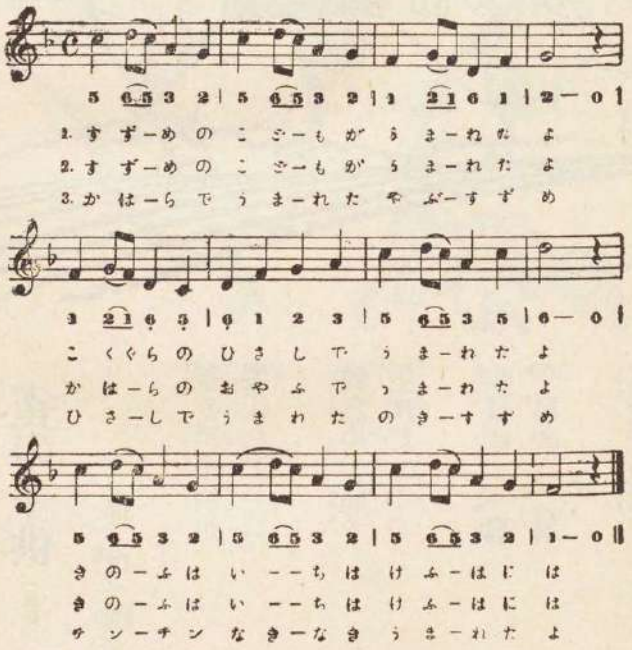
白眉出版社
東京芝區田町一の十二・振替東京五四五九八

—〔全國有名な樂器店にあります〕—



# 雀の子供

本居長世作曲





童謡集

合歡の提籃

加藤まさを氏作

▼新刊▲

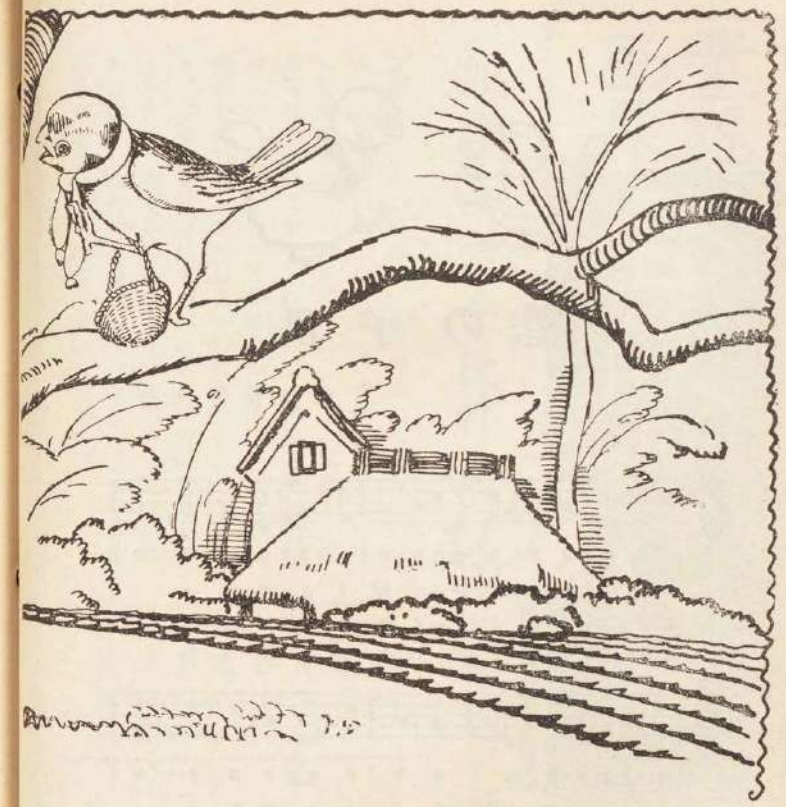
加藤まさを氏の童謡は、畫は見るから、きくから人々のこゝろのおくに、美しい情緒を芽ぐませずにはおかないものです。このことは、本屋よりはあなた方のほうが、どれだけよく御承知かしれません。この度、たつて作者におたのみして、こゝ幾年かの力作をあつめて一冊にしたものがこれです。商賣氣をはなれて、すばらしい立派な本をつくりあげたのもそのわけです。うら若い人々のこれは輝かしい情緒のお庫です。あなた方のやさしいかぎをまつ、これは可愛いお庫です。

用紙 アート紙
挿畫 原色版 百五十枚
挿畫 二色版 四十餘枚
天金 箱入 絹表紙 裝幀

定價 貳圓八十錢
外ニ 送料十八錢

内田老鶴圃

東京市本郷区
大傳馬町二丁目
電花浪一三五
振替口座
東京一二一六四



# 雀の子供（童謡）

野口雨情

雀の　子供が
生れたよ
穀倉の　廂で
生れたよ
昨日は　一羽
今日は　二羽
雀の　子供が
生れたよ

河原の　お藪で
生れたよ
昨日は　一羽
今日は　二羽
河原で　生れた
藪雀
廂で　生れた
軒雀
チン　チン　啼き啼き
生れたよ

# 不思議な蘭

西條八十

## 上、アメリカ人の變死

『ばあや、僕はこれから横濱まで行つて來ようと思ふよ。』

と、遠山さんが、晝御飯の濟んだあとで、珈琲を啜りながら云ひました。

『まあ、旦那さま、こんな今にも降りさうなお天氣ですのに、明日になさいましな。』

と、氣のやさしいばあやは玻璃戸越しに、どんよりした空を見上げてかう止めました。

『いゝや、今日はどうしても行つて來なくちやならない。實は横濱の或る家で、珍らしい蘭の賣物があるのだ。』

と、遠山さんは面白さうに云つて、

『ばあや、世間には似た人があるものだね。或るアメリカ人で僕とおんなじの蘭きちがひが居たのだ。その人は蘭と名がつけばどんな種類のものでも集めたいのが病で、若い時から五十幾つといふ齡までそれがためにあらゆる世界中の土地を旅行して廻つてゐたのだ。ところが今から一月半ほど前、印度のアンダマンといふ島で、やはり珍らしい蘭を採集してゐるうち、急に死んでしまつたのだ。なんでも毒のある水蛭に吸ひつかれたのが原因らしいが、誰も知らない叢の中に仆れて死んでゐたのを土人が見つけたのだ。ところでその時傍に落ちてゐた鞄の中には實に見たこともない珍らしい蘭の草がたくさんに入つてゐた。それをその死體を引きとつた友だちが、今度日本へ寄つた序に皆に見せて、とくべつに好きな人には分けてくれると云ふのだ。』

『まあ氣味のわるい！』

と、ばあやは肩をすくめて、

『ですから旦那さまも、そんな災難に出つくわさないよう今のうちに蘭の道樂なんかお止め遊ばせよ。』

『アハヽヽヽ、僕は大丈夫だよ。まだそんな遠くへは出かけないから。――だがとにかくこれから行つて來るよ。ばあや、蝙蝠傘を出しておくれ。』

遠山さんはかう元氣に笑ひながら出かけてゆきました。

夕方になつて遠山さんはひどく昂奮した風で歸つて來ました。晩御飯の濟んだあとの白い卓子の布の上に、買つてきた蘭の草をひとつ〳〵胴籃からとり出して並べました。

『どうだ、ばあや。これがワンダつて云ふんだよ。それから、これがデンドロオブで、これがバレオノフイスといふごく珍らしい蘭なのだよ。』

『へえ、こんなものがひとつ何十圓だの何百圓だのつてそんなお高いものなんですかねえ。』

と、ばあやはあきれたやうに、明るい瓦斯の灯の下の、その鳶色に縮くれた草の根のかたまりを眺めてゐました。

『ウン今日ぐらゐ僕は思ひ切つて買物をしたことが無いよ。珍らしいものはのこらず、まるで僕ひとりで買つちやつたやうなものだつた。――なかでもこれだがね……』

と、遠山さんはその中のうすぐろい妙な形をした根

をとりあげて、

『これはいつたいどんな種類　蘭なのだか誰にもまるで見當がつかないんだ。どんな本を見ても似寄りのものさへ書いて無いんだ。多分よつぽど珍らしいものなんだらうと思ふんだがね。これがそのバンツといふ可哀さうなアメリカ人がいちばん終ひに採集したものなのださうだ。』

『なんだか氣味のわるい恰好をしてゐますこと！』

ばあやは眉の根を寄せました。

『なにが氣味がわるいもんかね。見てゝご覽。僕が今にこれから、びつくりするやうな綺麗な花を咲かせるから。さあ、明日からまた溫室の仕事が忙しくなるぞ。』

遠山さんはゆつくり椅子にもたれてさも樂しみさうに云ひました。

『でも何だかほんとに厭な形でございますよ。まるで死んだふりでもしてゐる蜘蛛のやうな……』

ばあやはまだ云ひつゞけてゐました。

遠山さんはばあやの云ふことが、さもをかしいやうに默つたまゝニコ〳〵笑つてゐましたが、そのうちふと思ひついたらしく、

『さうだ。ばあやが氣味を惡るがるのももつともかも知れない。僕は今日その死んだアメリカ人について委しい話を聞いて來たよ。なんでもその人はマングローブといふ短かい樹の生えた沼地の中で死んでゐたんださうだが、そのとき仰向けに仆れてゐた死骸の下におしつぶされたやうになつてこの蘭の草があつたんださうだ。沼地なんてところは元來わるい瓦斯が多くあるところだから、その瓦斯でやられたのかも知れないと僕は思ふが、その死骸の血は一滴のこらず水蛭に吸ひとられてゐたといふ話だ。まあ考へかたによつては、この蘭がそのアメリカ人の命をとつたのだとも云へるね！』

『まあ何て恐い！』

ばあやは　さも恐ろしさうに身體をぶる〳〵つとさせて、遠山さんの話を皆まで聞かず隣の室へ逃げて行つてしまひました。

その翌日からの遠山さんの仕事はそれは〳〵忙しさうでした。やれ木炭だの、チークのかたまりだの、苔だのと騷ぎ立てゝ、わざ〳〵好きな蘭を培養するために建てたその小さな溫室の中へ、朝から晩まで入りびたりでした。しかも永い間萎れつばなしになつてゐた草の根の大半は、遠山さんの丹精のかひもなく、たうとう息を吹きかへしませんでしたがその中で、例の名前のわからない奇妙な蘭だけは一

日毎にだん〳〵勢がよくなつてきました。

遠山さんは大喜びでした。早速勝手へ飛んで行つて、煮物をしてゐたばあやを引つぱつて來て　説明をはじめました。

『どうだ、ばあや。これが芽だよ。今にこれが葉になるんだよ。それから、ホラ、こゝに出かゝつてゐる小さな奴があるだらう。これが氣根つて云ふのだ。』

『まあ、何だかわたしにはこれが、小さな白い指のやうに見えて、氣味がわるうございます。』

と、ばあやは又しても眉をひそめました。

『をかしいね。おまへはいやに氣味ばかりわるがるね。どうしてだい！』

遠山さんはぢつとばあやの顔を見つめました。



『どうしてかう氣味がわるいのか自分にもわかりませんが、なんだかその、今旦那さまの仰有つた氣根といふのが、妙に小さな人間の指のやうで、それが今にも旦那さまにつかみかゝりさうに見えるのでございます。』

と、ばあやは答へました。

『フ、ーン。』

と、遠山さんは腕を拱んで考へ込んで、

『なるほど、さう云はれて見ると、僕も今までこんな妙な恰好の蘭の氣根を見たことが無いやうだ。どうもをかしいよ、この先の方へ行つてズッと平べつたくなつてゐるところが……』

『何にしましても、旦那さま。わたくしはこの草を見ますと、どうも妙に頸もとから冷たい水でもかけられるやうな身ぶるひがしてたまりません。わたくしはもうご免を蒙ります。

ばあやはまた逃げるやうにして勝手の方へ行つてしまひました。

遠山さんはばあやがあんまりひどく今度の蘭をきらふので少々癪にさはりましたが、これも仕方がないとあきらめて、以後自分ひとりだけでこの珍らしい草の成長を眺めて樂しむことにしました。

蘭は溫室のなかで日増に大きくなりました。葉は普通の蘭に似て幅が廣く、色は艶のある濃い綠色をしてゐました。唯葉の付根のところにはつきりした赤い斑點があるのが目を惹きました。遠山さんはこんな變つた蘭の葉を今まで見たことがありませんでした。遠山さんはそれを寒暖計の下の低い臺の上にのせ、そのすぐ傍に熱い蒸汽がいつも管から滴り落ちて室の中を適當に濕ほす小さな裝置をしました。

さうして自分は暇さへあれば、そのわきの椅子にかけて、世にも珍らしい美しい花が咲き出るのを今か今かと樂しく待ちうけてゐました。（つゞく）

（不思議な蘭にかくれたる秘密は何でありませうか。次號に於て皆さんは思ひがけない大事件にぶつかるでせう。……記者）

# 銀の鞠

宮島資夫

昔し支那の盧州と云ふ所に、汪士秀と云ふ人がゐました。まだ年も若かつたのですが、大變に力があつて、大きな石臼を輕々と差し上げて人を驚かした事がある位でした。この人のお父さんも、汪士秀も二人とも鞠を蹴る事が上手で、いつも親子仲好く鞠を蹴つて樂しんでゐました。

汪士秀のお父さんはまだ四十五六位にしかならなかつたのでしたが、或る時、錢塘と云ふ所を船で過ぎる時に、大波が起つて船が覆つて死んでしまひました。汪士秀は大變嘆きましたが、どうしたものかお父さんの死骸すら發見する事が出來ませんでした。それから八九年の月日が經つて、汪士秀は或る時お父さんの亡き跡にお詣りに行き、その歸りに洞庭湖と云ふ所に船で泊りました。

丁度秋の中頃で、夜になると月は東の方から登つて來て、湖の面は絲絹のやうに美しく輝き初めたのです。汪士秀はその美しい景色に見惚れて、お父さんの事を何や彼と思ひ出して、考へに沈んでゐます



と、急に湖の面が、泡立つて、五人ほどの人影が現はれて來ました。不思議な事があるものだと思つて汪士秀は舷の影に身を隱して、その人達がどうするのかと、ぢつと見つめてゐました。するとその人達は、水底から持つて來た、大きな廣い敷物を、湖水の表てに敷きましたが、それは丁度疊か何かのやうに平らに、靜かに搖れもせずに浮いてゐます。その上に今度はお酒だのお肴だのを澤山並べてお酒盛の支度を初めました。色々な磨いた器物の觸れ合ふのが手に取るやうに見えますが、それは金物でもなければ陶器でもないと見えて、少しも音が聞えて來ません。

さてお酒盛の支度がすつかり出來ると、その中の三人がまるくなつて坐りました。あとの二人は家來だと見えて、色々と御給仕などをして居りました。三人の中の一人は黃色い着物を着て、あとの二人は白いのを着てゐましたが、三人とも頭だけはお揃ひに薄色の巾を卷いてゐました。家來は二人とも、黑い褐色の着物を着て、一人は子供のやうで、一人は老人のやうでした。

三人は皆な月の方を仰いで、お互ひにお酒を飲み合つてゐるやうでしたが、その恰好が如何にも古びてゐるので、よく見ようと思つて眼を定めて見るのでしたが、月の光が何となくかすんでしまつて、その顏形などが、はつきりしないのです。すると黃色い着物を着た人が、

『今夜の月は本當に珍らしい好い月だ。かう云ふ晩は、氣持よく愉快に飲み明かさうではないか』と云ふのが微かに聞えて來ました。

『本當にさうだ』と今度は白い着物を着た人が云ひました。『丁度いつか、廣利王が、梨花島で月見の宴を開いた時によく似てゐる。』

それから三人はまたお互ひに酒を勸めたり、何か話をするやうでしたが、あとは少しも聞えなくなつてしまひました。汪士秀はぢつといつまでも眺めてゐると、その家來の老人が如何にも自分の父親に似

てゐるやうに思はれるのでしたが、時々かすかに傳はつて來る聲を聞くと、まるで違つてゐて、どうもさうらしくも思はれないのでした。夜もだん〳〵更けて、眞夜中頃になつて來ますと、黄色い着物を着た人が急に大きな聲で、

『かういふ月の好い晩に、一つ蹴鞠をして遊ばうではないか』と云ひ出しました。すると側にゐた子供の家來が、すぐと水の中へ潜つて行つて、しばらくすると大きな大きな圓い鞠を抱へて來ました。その鞠は、硝子の中に水銀でも入れてあるやうに、美しい銀色に月の光を受けてぴか〳〵と光つてゐました。黄色い着物を着た人は、

『さあ初めよう』と云つて立ち上ると、お翁さんの家來を相手に蹴鞠をはじめました。鞠は一度蹴られると、一丈の餘も高く上つて、きら〳〵と、人の眼を射るやうに輝きました。その中にどうしたはづみか、すつと高く上ると汪士秀のゐた船の方へ飛んで來て、汪士秀の隱れてゐる眼の前にぱたりと落ちました。汪士秀は自分も好きな蹴鞠の遊びをさつきから隱れて見てゐて、どうかして仲間に入りたいと思つてゐた矢先ですから、その鞠を見ると思はず力一杯蹴上げました。するとその鞠は馬鹿に輕くつて高く〳〵飛び上りましたが、餘りひどく蹴つたものですから、破けたと見えて、中の光る物が空の虹のやうにぱつと擴がつて、丁度花火のやうになつたと思ふと、すぐ水の中に落ちてぶく〳〵と大きな音を立てゝ沈んでしまひました。

向うの席にゐた三人の者は、それを見るとひどく怒つて、

『我々がかうして折角樂しんでゐるのを妨げたのはどこの人間だ』と口々に怒鳴りました。すると老人の家來が之れをなだめて、

『まあよろしいではありませんか、家の流星が拐かされたと思つてお諦めになれば』と云ひますと、白衣の人が尙ほ怒つて、

『なんだ貴樣のやうな老人が餘計なことに出しやばつて生意氣な事を云ふな、すぐと行つてあの馬鹿者を捉へて來い、もし云ふ事を肯かなければ、兩足を引き裂いて一口に喰つてしまふから』と怒鳴りつけました。之れを聞くと流石の汪士秀も驚いて、向うから來ない中に逃げたいと思ふのですが、何分船の中でどうする事も出來ません。そこで覺悟をきめて刀を拔いて舷に立つて待つてゐますと、その老人と子供の家來が、武器を手にして近づいて來ました敵味方の間が、ほんの僅かになつた時汪士秀がよく見ると、その老人は矢張り自分のお父さんなので、驚いて、

『お父さん、お父さん、私です、汪士秀です』と叫びました。お父さんも驚いて、すぐにこちらの船に飛び乘りましたが、それを見ると子供は急いで逃げて行きました。

『汪士秀、お前はそんな所にゐたら殺される、早く匿れてしまひなさい』と

お父さんがやつと云つたか云はない中に、三人の者は船に近づいて來ました。汪士秀はやつとその時顔を見る事が出來ましたが、何れも何れも漆のやうに黑い顔で、お盆のやうな大きな眼を光らせてゐる者たちでした。その中の黃色い着物を着た化物は、お父さんを引ッつかんで攫つて行かうとしますので、汪士秀もあらん限りの力を出して引き留めました。船は二人の爭ふ勢ひで纜も切れて覆らんばかりになりましたが、その時汪士秀は持つてゐた刀を取り直して、お父さんを捉んでゐる臂をばさりと斬り落しましたので、黃衣の化物は驚いて逃げ出してしまひました。すると今度は白い着物を着た中の一人が、また汪士秀を目がけて飛び附いて來ましたが、さつそくに頭の邊りを一太刀ぐさと突き通したので、化物は水の中にばたりと落ちました。その時ひどい水沫が起ちましたが、あとはしんとして俄かに靜かになつてしまひました。

そこで汪士秀は船底で慄へてゐる舟人達を勵まして、急いで船を漕ぎ出させました。しばらく行くと今度は湖の面に、急に井戸のやうに溺く深い穴が出來ました。汪士秀は眼を定めてよく見ると、それは化物の喙なのです。そして化物が暴れる度に湖水の水は泡立つて來るのでしたが、その中にその巨きな喙から、天にも屆くやうな大變な水を噴き出し初め

ました。すると浪は逆立ち、打ち寄せ打ち返して、ひどい暴れ方になつて來て、船は木の葉のやうに漂つて、進む事も退く事も出來なくなりました。此時湖水に船を浮べてゐた人達は、誰れも彼れも命はないものと覺悟するほどひどくなつたのです。

汪士秀の乘つてゐた船には、重さ百斤にも、餘りさうな、鼓のやうな石が二つ乘せてありました。汪士秀はふと眼をそれに注ぐと、之れこそ屈强と、その一つを取つて差し上げるが早いか、化物の口元目がけて、えいつと投げ込んだのです。浪はまた一時一層激しくなりましたが、殘る一つを投げ込むと、忽ち靜かになつて、明方近い夜の空から、月はまた湖水の面を美しく照し初めました。

舟人は漸く安心して船を漕いでゐましたが、獨り汪士秀ばかりは、こゝにゐる父親はきつと幽靈だらうと思ふと、何となく心が安まりませんでした。その樣子を見たお父さんは、

『汪士秀や、お前は決して心配しなくつても好いのだ。私はまだ幸ひに死なずにゐた。それといふのはこの前、錢塘を渡る時に、私の仲間であつた十九人の者は、皆な化物の爲めに喰はれてしまつたが、私は鞠を蹴る事が上手であつたばかりに、救けておかれたのだ。その後あの化物達は、錢塘で惡い事をした爲めに、そこの大公から洞底の方へ流されてしまつたので、私も一緒に連れて來られたのだ。あの三つの化物は皆な魚の精で、鞠の代りにしてゐたのは魚の氣胞だよ』

と話してくれました。それで汪士秀もお父さんが本當に生きて居られた譯が判つたので大變に喜んで、色々とお話をしながら、夜通し船を漕がせて行きました。

明け方になつて氣がついて見ますと、船の中には四五尺もあるやうな魚の翅が落ちてゐました。

『あゝこれが昨夜お父さんをつかまへた、あの黃色い男の臂でした』と云つて、汪士秀はお父さんの顏を見て笑ひました。

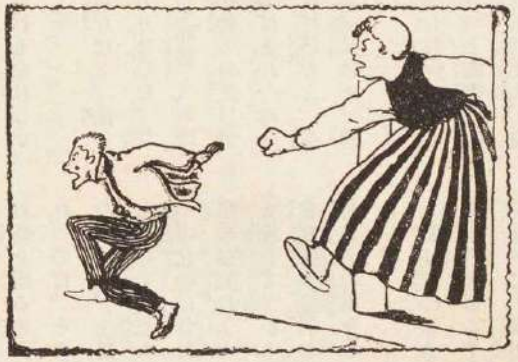
（をはり）

# 繪物語　小さな男

岡本歸一

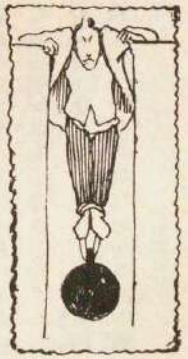
ある所にお上さんは背が五尺九寸もある大女で、御亭主はたつた四尺七寸しかない小男で背が一尺二寸もちがふ蚤の樣な御夫婦がありました。

その上お上さんは大變氣の強い女でしたから御亭主のする事が氣に食はないとほん〳〵怒つて御亭主をひどい目にあはせました。御亭主は口惜しくて



耐りませんが、なにしろ相手は五尺九寸と云ふ大女ですから、力づくではとても敵ひません。

どうにかして背が高くなりたいと、いろいろ工夫をしては試して見ますが一向にきゝめがありません。

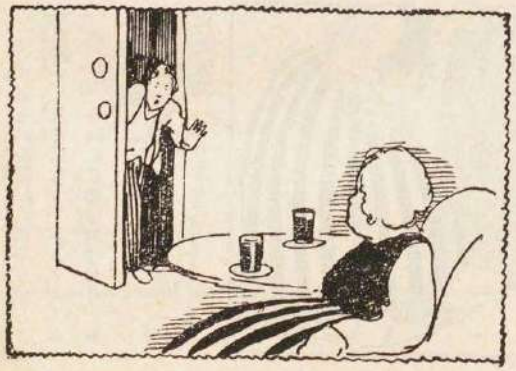


ある日友達が君にいゝ事を知らせに來たんだと云つて、昨日この町へ背高くしたり低くしたりする藥を持つてるるトルコ人が來たと教へて呉れましたので、御亭主は涙をこぼして喜んで早速二人でそのトルコ人の家へ出かけました。

トルコ人は「あなた方の目の前で試して見せます」と二人のボーイをよんで一人に黑い藥を飲せると、みる〳〵一丈五尺もある大男になりました。一人には赤い藥をのませると豆つぶ位に低く小さくなりました。どうですあなたはどちらがお入用ですかと聞ました

御亭主は今の今までどうにかして背が高くなりたいと考へてるましたが、それよりもお上さんを豆つぶの樣に小さくして今までの仇をとつてやらうと赤い方の藥をそれもだんだんに低く小さくなる樣に調合して貰つたのを買つて一人にこ〳〵して歸つて來ました。

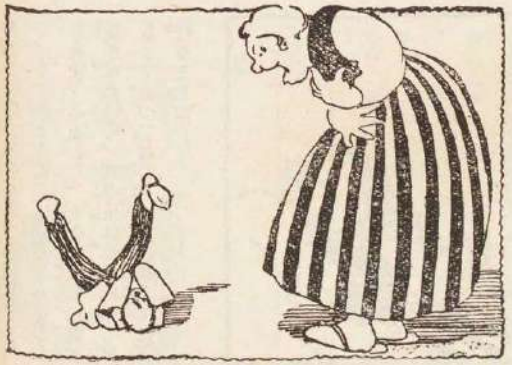
どうにかしてその藥をお上さんに呑ませうと苦心してるますと、ある時お上さんが「私頭痛がするから葡萄酒を呑んで少し寢よう」と云ひましたので御亭主はこの時だと私は頭痛にいゝ藥を持つてるるから調合して上げよう、そして二人で葡萄酒を呑まうと一つのお上さんの方のコップへ例の藥を入れて、さア呑まう直ぐに頭痛がなほるからとすゝめました。その時玄關に郵便屋が來たので、御亭主は私が歸つて來るまで待つておいでと云ひ殘して出て行きました。



質を云ふとお上さんは頭なんか痛くもないのですが、ひる日中から葡萄酒を呑んで寢るのもさすがに氣がとがめたので頭痛がすると云つたのですから、藥の入つたお酒なんて呑みたくもないので御亭主の居ない間にコップをそほつと取りかへておきました。

それとはしらない御亭主いまにみろ今までの仇をとつてやるからと大急ぎで歸つて來て、さア呑まう、え、呑みませうと二人ともぐつと一息にのんで了ひました。さアしめたぞ今に小さくなり出すぞ、其時べそかいたつてだめだぞとお上さんの顏をみてゐました。

すると急にお上さんがアハ、、、とつて「あなた私は頭痛がなほつちやつたから、あなたのコップととりかへておいたのも知らずに頭痛の藥をのんで了つた」と云つてハ、、ハ、、、笑ひました。さアそれを聞いた御亭主飛び上る程驚いて眞青になつてぶる〳〵ふるへ出した。それに此藥は怒つたり、驚いたり、悲しんだりすると、きゝめが一層早いので見る〳〵低く小さく一尺位な人間になりました。

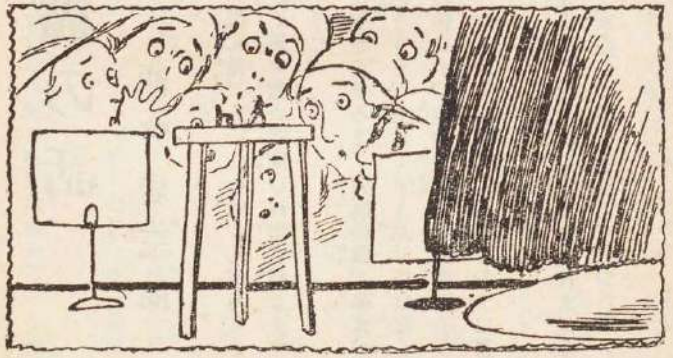


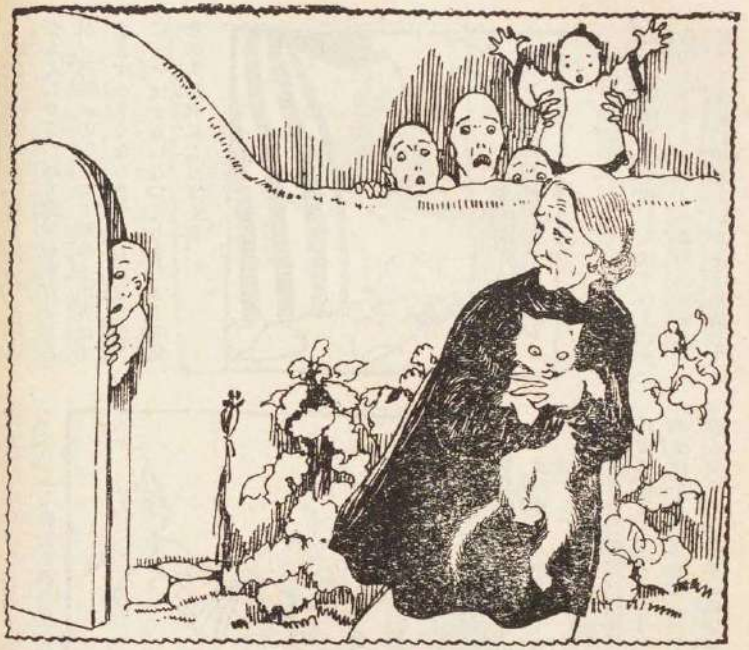


おどろいたのはお上さんです。なにがなんだかさつぱり譯がわかりませんが、可笑いので笑ふと御亭主の方はますます小さくなります。五六日たつ内に三寸ばかりになつてしまひまして近所の矢評判になりました。

ある日洋服屋さんがその御亭主の小人を一週間百圓で貸してはくれまいか店のショウインドーへ最新流行の服を著せて廣告に使ひたいからと申込むで來ましたので、お上さんは一も二もなく承知して嘗かる御亭主を渡しました

可愛想な御亭主はたうとうショウインドウの中へ入れられて皆に見られるので悲しんだり口惜しがつたりするので、ます〳〵小さくなりました。外は黒山の樣です、とうとうしまひには蚕の樣に小さくなりました。そして店員がショウインドウの硝子戸を開ける時ふき込むだ風にふき飛ばされて行方が知れなくなつて了ひました。（なほり）





# 赤猫の話

沖野岩三郎

昔、支那の都に孫三といふお爺さんがありました。毎朝小い箱を擔いで商ひに出て行きます時、決つたやうに、

『おい、猫に氣をつけろよ。何所の誰が來て、何と云つて賴まうと、決して〳〵見せてはならないぞ。あの猫はナ、俺の子供より大事の〳〵猫だから……』と大きな聲で、呶鳴るやうに言ひました。

『はい〳〵畏りました。決して〳〵誰にも見せませんから、安心して商ひに行つてらつしやいまし。』

中から答へる婆アさんの聲も、可なり大聲でした。



近所隣の人達は長い間、かうして爺さんと婆アさんとの問答を聞いてゐるばかりで、猫の姿を見た者は一人もありませんでした。けれども時々家の中から、ニャゴ、ニャアゴといふ猫の泣聲が聞えるので、全體どんな猫だらうか、見たいものだと思つて、いろ〳〵と苦心しました。

或人はお魚の煮たのを持つて行つて、

『お婆アさん、これをお家の猫にあげてくださいまし。』と云つて差出すと、婆アさんは、

『有難うございます。折角でございますが、私の家の猫は魚が嫌ひでございますから、これは私が頂戴致して置きます。』と云つて、自分で食べてしまひます。猫は其の香を嗅いで、一室の中で、ニャアゴ、ニャゴ……と頻りに啼いてゐます。

或人は、どうかして其猫の姿を見たいと思つて婆アさんのお留守の間に、そつと戸の隙間から中を覗いてみました。けれども猫は大きな箱の中でニャゴ……ニャゴ……と啼いてゐるばかりで、姿は見えませんでした。不思議な事には、其箱の上には、立派な刺繍のある絹の布片がかけてありました。

『どんな猫だらう？　尻尾だけでも宜いから見たいもんだなア。』

『ねエ、耳の尖だけでも宜いから見たいもんだ。多分麝香猫だらうよ。あの一疋何千圓もするといふ……』

『雷獸かも知れないよ。雷の鳴る時、天から降つて來る猫があるといふ話だから……』

『そんな珍らしい猫を、あの爺さんは何所から買つて來たのだらう？』

『何しろ、餘程珍らしい猫に違ひない、子供より大事の猫だといつてゐるから。』

話は段々と次から次へと擴がつて行きました。そして、近所の人達は皆な、何うかして其の猫を一目見たいものだと思つてゐましたが、毎日々々その泣聲を聞くばかりでした。

所が或日の事、例の通り爺さんが呶鳴りながら出

て行つた後で、婆アさんの家では、火事でも起つたやうに、ドタン、バタンと大騒ぎの音が致しました。

何事だらう？　と思つて近所の人が駈けつけますと、婆アさんは跣足で家の外へ飛び出して來ました。そして垣根の所に蹲んでゐる、眞紅な〳〵美しい猫を抱いて家の中へ走り込みました。

『先ア！　赤猫？』と云つてお隣の妻さんは眼を圓くしました。

『本當に！　火のやうに眞紅でしたよ。』と若い娘は言ひました。

さア近所隣の人達は、孫三爺さんの家には眞紅な不思議な猫を飼つてゐると云つて、多勢が集つて、やア〳〵と其の噂話をしてゐました。そして又たそれは雷獸だらう？　麝香猫だらう？　などと取沙汰をしてゐました。

その晩、歸つて來た孫三爺さんは、家へ入ると直ぐ、

『婆アさん、どうして今朝は、大事の〳〵猫を外へ出した？　もう近所の人達は大評判をして居るぢやないか……』と云つて呶鳴りました。最初のうちは呶鳴る聲だけ聞えて居ましたが、後には婆アさんをひどく毆る音まで聞えて、婆アさんはヒイ〳〵と泣いてゐました。

所がその二三日後に、一人の立派な貴夫人が孫三爺さんの所へ來まして、

『誠に濟みませんが、お宅には不思議な赤猫を、お飼ひになつてゐるといふお話ですが、私に一寸お見せ下さいませんでせうか。』と賴みました。

『はい、赤猫は飼つてゐます。けれども家の爺さんが誰にも見せてはいけないと申しますので、お見せ申す事は出來ません。』

婆アさんは、きつぱり斷りました。

『では、お婆アさん、私は誓つて誰にも申しませんから、たつた一目だけお見せ下さいまし。これはホンの僅かばかりですが、』と云つて貴夫人は、お金を十圓、婆アさんに上げました。



『では、一寸だけ見せて上げます。一寸だけですよ。』

念を押して婆アさんは、美しい絹の布片のかゝつてゐる箱の中から、一疋の眞紅な猫を出して見せました。

猫は本當に眞紅でした。尾も足も髯も皆な朱のやうに紅うございました。

『まア美しいこと！　一寸私に抱かして下さいませんでせうか。』

『否エ、それは家の爺さんが子供よりも大事の〳〵猫ですから、お抱かせ申すワケには參りません。』

婆アさんは又た、きつぱり斷りました。

『では、お婆アさん、私はその猫を抱いたつて誰にも申しませんから、たつた一度だけ抱かして下さいまし。これはホンの僅かですけれど……』と云つて貴夫人は又たお金を十圓、婆アさんに渡しました。

『では、一分間だけですよ、本當に一分間だけですよ。』

念を押した婆アさんは、紅猫を貴夫人の膝の上に載せました。

『まア美しい猫だこと！　お婆アさん、これを私に賣つて下さいませんか。』

貴夫人は猫をシツかと抱き締めながら言ひました。

猫は苦しさうに赤い〳〵頭を掉つて、ニャアゴと啼きました。貴夫人の耳には其の鴉聲までが紅いやうに聞えました。

『飛んでもない事！　それは此の家の大事の〳〵寶ですもの……』

婆アさんは周章て猫を奪ひ還さうとしました。

否エ、お婆アさん、これは私が買ひます、どうあつても私が買ひます。千圓に賣つて下さい千圓に！』

貴夫人は猫を抱き締めたまゝ立上りました。

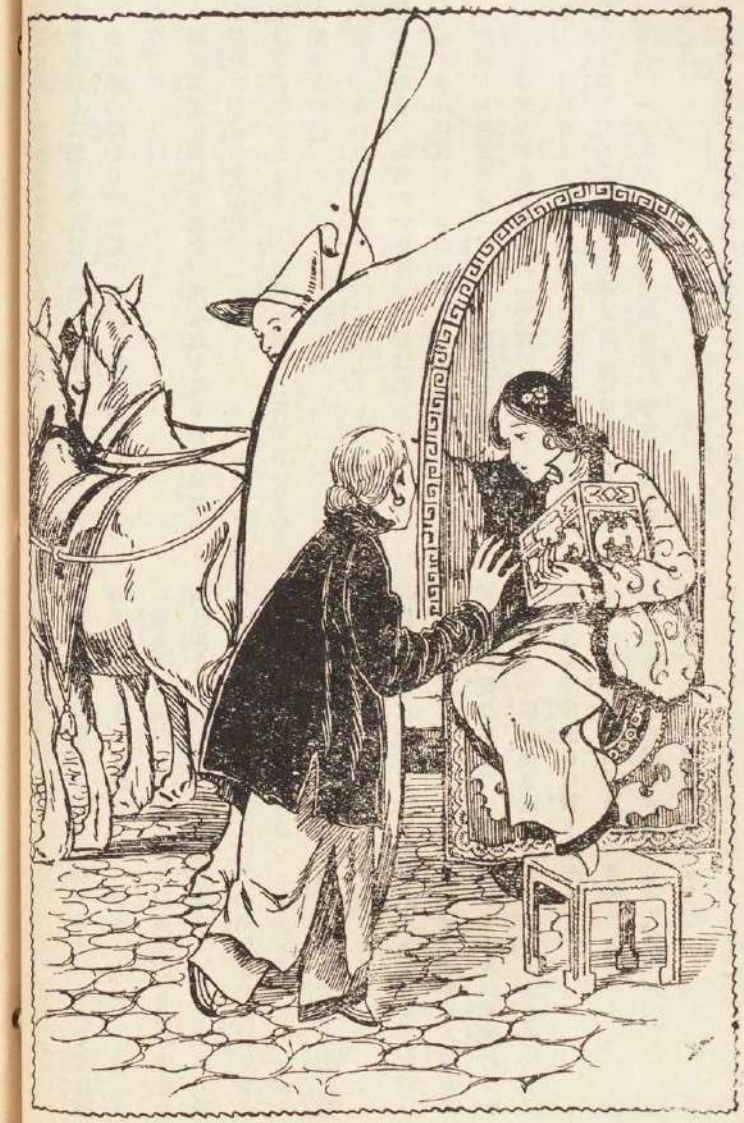
『いゝエ、千圓には賣りません！』

『では二千圓に買ひませう！』

『いゝエ、二千圓には賣りません！』

『では、三千圓に買ひませう！』

『いゝエ〳〵三千圓には賣りません。』





『どうしても賣つて下さいませんか、私は今日三千圓しか、お金を持つてゐません……』

貴夫人は殘念さうに、さう言ひました。そして悲しさうに猫を婆アさんに返さうとしますと、婆アさんは涙を流しながら、

『では、奥樣……あなたがそれ程お望みとあるなら私の獨斷でお賣り致しませう。けれども爺さんはきつと私を叱るでせう……』と言ひました。

『お婆アさん、お爺さまがあなたを叱りましたら、私がお詫びに參りますから、どうぞ此猫をお賣り下さいませ。』貴夫人は嬉しさうに、懐から三千圓のお金を出して、婆アさんに渡しました。

『では大事の〳〵猫だけど……』と云ひながら婆アさんは、惜さうにその紅猫を美しい箱に入れて貴夫人に渡しました。

貴夫人がその箱を馬車へ乘せて、歸らうとしますと、婆アさんは小い聲で、

『奥樣、此の猫は主人の心次第で、毛の色が變りますから、御用心なさいましョ。』と申しました。

貴夫人は、婆アさんの言葉を耳に留めませんでした。ですから、

『宜しいとも、大事に〳〵して飼ひますから、色の變るやうな事はありません。』と申しました。

いよ〳〵馬車が動き出さうとした時、婆アさんは、皺のよつた顔を馬車の窓の中へつき入れて、

『紅よ、左樣なら！』と悲しさうに言ひました。

『左樣ならお婆アさん……』と貴夫人は申しました。

夕方歸つて來た孫三爺さんは、又た大聲をあげて婆アさんを叱りました。『馬鹿！　あの猫が二千圓や三千圓で買へると思ふか……さア今行つて直ぐ取返して來い、早く取返して來い！』と呶鳴る聲が門の外まで聞えました。けれども婆アさんは何所へも出て行つたらしくは思はれませんでした。

それから半月程後の事でした。孫三爺さんは、小い箱を擔いで、例のやうに商ひに出ようとしてゐる所へ馬の蹄の音が聞えて、門前に立派な馬車が留り

ました。中から出て來たのはさきの貴夫人でした。

『お婆アさんは居ますか。』と貴夫人は尋ねました。

『はい居ります。』と云つて爺さんは大聲で婆アさんを呼びました。貴夫人は、家の中から出て來た婆アさんの顔を見た時、かう申しました。

『お婆アさん、私はあなたに紅猫を買ひました。そしてそれを天子樣へ差上げました。すると天子樣は世にも珍らしい猫だと仰しやつて、毎日々々大事にして居られましたが、どうしたものか、五日目には紅い毛が茶色に變り、十日目には眞白くなりました。どういふワケでございませう？』

貴夫人の言葉を聞いた婆アさんは、涙をホロ〳〵と流しながら、『悲しい世の中になりました。』と云つて袖を顏に押當てました。

貴夫人は顏色を變へて、婆アさんの手を執り乍ら『どうしたと仰しやるんです？　天子樣の御身の上に何とか御異狀があるのではありませんでせうか。』と尋ねました。すると婆アさんは、

『あの猫は赤く塗つてあつたのです。色が褪めて來た時、元々通りに赤く塗直すだけの智慧のない天子樣では、此の大きな支那の國を治めなさる事は困難でございませう。』と云つて泣きました。

獸つて二人の會話を聞いてゐた孫三爺さんも、『さうだ〳〵、婆アさんの云ふ通りだ。』と云つて大聲をあげて泣きました。貴夫人も心配で堪らないやうに、眼に涙を一杯溜めてゐました。（なほり）



# ニヤン吉とワン三郎

梅田龍子（十一歳）

或所にニヤン吉といふ猫とワン三郎といふ犬が居りました。昔通は猫と犬といへば、猫が犬をこはがりますが、不思議にもこの二匹はそれは〳〵たとひ樣もない程仲がよいのです。それは元から仲がよいのではありません。元はやつぱり普通のやうに仲が惡かつたのでした。

それではどうして仲がよくなつたかと申しますと、それはかうなのです。ワン三郎は、或時ふとした病氣にかゝつて寢て居ました。其時ニヤン吉が天井裏にそつといつてのぞくと、大きな鼠が五六匹居りましたから、ニヤン吉は『これはうまいうまいぞ。』と思つてふいに飛出し、たちまちの内に二三匹を食ひ殺してしまひました。それからいつもの通り御料理しましたが、とても一人で食べられませんから、

『この頃はワン三郎は病氣で困つて居るから一つこの鼠をもつていつて、今日から仲善くなつてもらふやうに頼んでこよう。』と、一人言をいつて、のこ〳〵とワン三郎の所にきました。そしてやさしい聲を出して『もし〳〵ワン三郎君、僕はね、ちよつと用事があつてきたんだが。』とていねいな言葉で申しました。

『なんだ用事と言ふのは、人が病氣だと思つていゝ氣になつてやつてきてうるさい奴だ。』とワン三郎はブン〳〵怒つて居ました。

『君そんなに怒らないでもいゝではないか。實は別に用事といふ程でもないが、たゞ今日から仲よくならうと思ふんだがね、君は僕と仲よくなつてくれないかね。』とニヤン吉は相變らずやさしく言ふと、ワン三郎は急にニコニコして『僕もやつぱり君と仲よくならうと考へて居たのだよ。時に君、何かもつて來てくれたかい？』とワン三郎は食しんぼうと見えて何か言ふとすぐ食べ物の事ないふのです。

ニヤン吉は『僕は今日鼠を取つて來てやつたのだよ。犬の病氣には鼠が一番よいさうだ。それはずゐぶんおいしいよ。』『さうかい、それは有難う。』といつて、その鼠をむしや〳〵と食べてしまひました。さうすると病氣はけろりとなほつて、元のやうに元氣付ました。

それで二匹は旅行をする事にきめました。初は滿洲に行かうと思ひましたが、滿洲は遠すぎるから日光へ行く事にきめました。

日光には東照宮、華嚴の瀧などの有名な所があるから、それを見ようと定めて家を出ました。汽車にのると皆見る物〳〵めづらしくないものはありません。二人は驚いてべちやくちや〳〵としやべつて居るうちに、早日光に着きました。まづ停車場の前の茶屋に入つて茶を一ぱいのんで、東照宮へ行かうとしましたが道が分らぬので途方にくれて居ました。

そこでしかたがなしに茶屋の人に聞くと、『この電車線路を傳つて行けばすぐにわかります。』と敎へてくれました。敎はつた通り行くと東照宮の前に出ましたから、中に入りました。日暮門などのりつぱな門をたくさん見ました。それから道を敎はつて華嚴の瀧を見ました。もつと外の瀧を見ようと思ひましたが、日が暮れようとしたので、繪葉書だけ買つて家に歸りました。（をはり）

# 流罪になるまでの賴朝

窪田空穂

## 一

平家では賴朝を宗清に預けました。それは二月の九日のことでしたが、平家では、十三日には賴朝を斬つてしまはうといふことに決めてゐました。

賴朝も自分が何かされるかといふことは察してゐました。宗清の手に捕へられてから、賴朝は、父の義朝や上の兄の惡源太義平のことを知ることができたのでした。父の義朝は、正月の三日、たよつて行つた尾張の野間の長田忠致の家で殺されてしまひました。忠致は平家からの褒美の欲しさに、自分の主人を欺し討にしたのでした。首は京都へ持つて來て獄門に懸けられました。義平は、飛驒の國で大勢の家來を集めましたが、義朝が殺されたと聞くと、その家來たちは散り〳〵になつてしまひました。義平は、一人で京都へ來て、せめて清盛なり重盛なりを殺して、親の無念を晴らさうと思つて、卑しい人間に身をやつして六波羅へ出入りしてゐましたが、宿にしてゐた家の主人に密告された爲に平家に捕へられて、加茂河原で斬られてしまひました。賴朝は初めてかうしたことを知つたのでしたが、そればかりではなく、平家では義朝の子は、殘らず搜し出して殺さうとして、義朝の妾で、今若、乙若、牛若といふ三人の子供のある常磐が、子供を連れて何處かへ逃げてしまつてゐるのを自首させる爲に、常磐の母を捕へて牢に入れていぢめてゐることまでも聞きました。

賴朝はそれこれを聞いて、自分も義朝の子だから殺されるとは覺悟してゐましたが、しかしその日がもう今日明日に迫つてゐることは、知らせる者がないので知らずにゐました。

賴朝を預つてゐる宗清は、今日明日にも斬られようとしてゐる賴朝を可哀さうに思ひました。何うかして助けたいと思つて、その方法を考へて見ましたが、池禪尼に賴んだら、ひよつとしたらば助かるかも知れないと心附きました。この池禪尼といふ人は清盛には繼母にあたる人で、宗清の主人の尾張守賴盛には母にあたる人でした。今、平家の中では一番に大事にされてゐる人です。至つて情深い人で、これまでも何人かの命乞をしてもゐます。それに、池禪尼には家盛といふ子があつて、大變に可愛がつてゐましたが、それが十年ほど前、二十三で死んでしまひました。池禪尼は今でも家盛のことを忘れえずに嘆いてゐます。ところが、賴朝の面ざしが、どこかその家盛に似てゐるのです。宗清が今度池禪尼に逢つた時に、そのことを話すと、如何にもなつかしさうにしました。宗清はそのことを思ひ出したのでした。

宗清は賴朝に、

『お命を助からうといふお氣はありませんか。』と聞きました。これは、ともしたら父や兄弟と一しよに

死なうと云ふかも知れないと思つたからでした。すると頼朝は、

『保元には大勢の伯父や親類が死られたし、今度の軍では、父上や兄弟が死られた。私は坊さんになつて後世を弔つてあげたいとまで思つてゐるから、命は惜しい。』と云ひました。

さう云はれると宗清は氣の毒になりました。

『それでは、かうなさいましては如何です。』と云つて、池禪尼のこと、家盛に似てゐると話すとなつかしがつたことなどを話しました。

『でも、誰が頼んでくれるだらう。』と頼朝が云ひますと、

『それならば、叶はないまでも、私が申して見ませう。』と宗清は云ひました。

宗清は池禪尼の所へ行つて、取繕つて云ひました。

『誰から聞いたのか知りませんが、貴君が慈悲深い方で入らつしやるといふことを知つてゐまして、「何うぞ頼朝の命乞をしてお助け下さいまし、父の後世を弔らひますから」と申されましたが、如何にもお可哀さうです。何うぞ宜しきやうにお願ひいたします。』

『頼朝に、私が慈悲者だなんて誰が聞せたのだらう。以前は私のいふことも通つたが、此頃では何うだらうか。』と池禪尼は困つた顔をしましたが、

『あゝ、右馬助（死んだ家盛の事）に似てゐるといふので可哀さうだ。來世で彼に逢へると決つてゐたら、私は今直ぐにも死ぬ。さうだ、叶はないまでも命乞をして見よう。』と云ひました。

池禪尼は重盛を自分の所へ呼びました。重盛は情深い人でもあり、今度の軍では第一番の手柄をした人だから、この人から清盛に頼ませようと思つたからでした。

池禪尼は重盛に、頼朝の云つたこと、自分の可哀さうに思つてゐる心持を話して、その事を頼みました。そして、

『右馬助（家盛のこと）はお前の爲にも伯父にあたる人だ、何うぞ頼朝を助けて、家盛の形見を、この尼に見せて下さい。』と云ひ添へました。

重盛は父の清盛に、この事を云ひました。すると清盛は非常な不機嫌な顔をしまして、

『池殿（池禪尼のこと）は、父上同樣に思つてゐるから、何のやうな御無理な仰せでも背くまいと思つてゐるが、此ればかりは出來ない。武士の子に油斷がなるものか。それにあの頼朝は、義朝も目をつけてゐた子と見えて、役も兄達よりも上にし、源氏の重代の鎧や刀も與れてゐる位ではないか。かた〳〵助けることは相成らん。』と云ひました。

重盛がそのことを傳へると、池禪尼は泣き出しまして、

『昔だと私の云ふことも通つたらうに、もうそんなにまで輕く扱はれるのか。源氏の一門はみんな亡びてしまつた、あんな子供の一人ぐらゐ殘して置いたからとて、何だらう。それに私は、何ういふ因緣か、頼朝の殺されるのが不憫でたまらない。それに又、家盛に似てゐると聞いた時から、彼のことが思へて胸が一ぱいで、湯水も通らなくなりました。これでは命もたまるまいと思ふ。この尼を生かして置かうと思ふなら兵衛佐（頼朝のこと）を助けて下さい。』

重盛は困つてしまひました。

『それならば、もう一度申上げて見ませう。今度は尾張殿（頼盛のこと）からも御一しよに行つていたゞきませう。』

さう云つて、重盛は頼盛と一しよに清盛にその事を取次ぎました。清盛は、今度は直ぐには斷りませんでしたが、當惑した顔をしてゐるだけで、何とも云ひませんでした。重盛は、

『女のことですから、祖母上（池禪尼のこと）は、まるで子供のやうに一圖になつて歎いて入らつしやいます。お聞入れになりませんと、御後悔になるやうなことがあるかも知れません。それに當家の榮えるのも衰へるのも運次第で、一人の頼朝の有る無しには依らないことでせう。御心配には及びますまい。』

清盛はたうとう、

『十三日に斬るのは延せ。』

と返事をしました。しかしまだ、助けるとも助けないとも確かなことは云ひませんでした。

頼朝は、殺されるのが日延べになつたのは、源氏の氏神八幡大菩薩の守られるのだと思つて、祈念を籠めました。

それに、父義朝の四十九日も近いといふので、僧に頼んで供養をしました。

さうしたことを聞いた池禪尼は、一層不憫に思つて、樣々に清盛に頼みました。清盛はたうとう、死罪より一等だけ輕くして、伊豆の國へ流すことにしました。

## 二

頼朝の伊豆へ向つて都を立つたのは、永暦元年の三月二十日の曉でした。その時は、隱れてゐた源氏の侍が僅かばかり現はれて來て、供をすることになりました。

侍たちは、平家を憚り、幼い主君の上を案じて、出家を勸めようと相談しました。

『唯今のところは、御出家を遊ばすやうに申されてお立ちになつては如何でございます。それだと池殿(池の禪尼)もお喜びになりませうし、平家の人たちも安心しませう。』

さう勸められても頼朝は知らん顏をして、返事もしずにゐました。その中の一人の侍は、頼朝の耳元に口を寄せて、

『何と云はれても、髮はお剃りなさいますな。お勸かりになつたのは、八幡大菩薩のお計ひです。』と云ふと、頼朝はこれにも返事はしませんで、たゞ頷いてだけ見せました。

かうした心を持つた十四の頼朝は、三四人の供を連れ、平家からの見屆の侍に守られて、遠く遙かな伊豆の國へ向つて都を後ろにしたのでした。

(をはり)

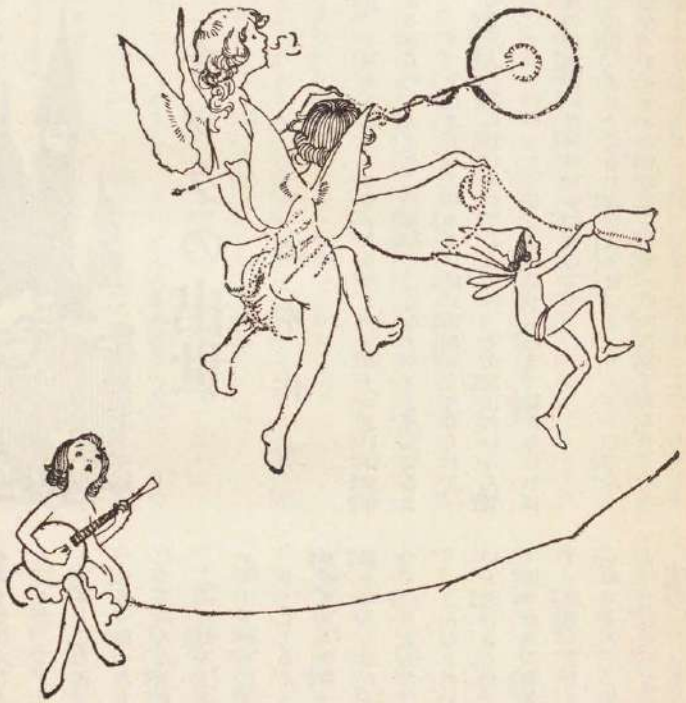
# 眠りの國

内藤豐雄

朝の御飯の時から僕は
一日友達と家にゐる
けれども僕は毎晩々々
遠いねむりの國へ行く

話し相手の人もなく
一人ぼつちで僕は行く
流れにそうて唯一人





夢の小山をうち越えて

食べる物も見る物も
みな珍らしい物ばかり
ねむりの國には夜明けまで
驚く事がたんとある

どんなに道をさがしても
晝間はとても賜られぬ
あの珍らしい音樂も
はつきり思ひ出されない

（スティーブンソン）

# ヂックの出世

山本作次

昔、イギリスにリチャード・ウキッチングトンといふ少年がありました。人々はこの少年のことをヂックと呼んでゐました。ヂックはまだほんの小さい時に両親になくなられて、ある貧乏人の家に預けられてゐました。その家はたいへん貧乏で、ヂックのやうな子供でさへ朝から晩まで働かなければ三度の御飯がいたゞけなかつたのです。

その頃、ヂックのゐた町の人々は、よくロンドンの噂をしました。イギリスの首府で、世界一の大都會であるロンドンを知つてゐるといふことが、大そうな自慢になつたのです。



そのくせほんたうにロンドンへ行つたものは一人もありませんでした。で、その人たちのいふところによると、ロンドンといふところは、お金持ばかりゐて、朝から晩まで、歌を歌つたり、踊つたりして暮してゐるところでした。それに舗石だつてみんな黄金でできてゐて目映いくらゐださうです。

こんな話をどこへ行つてもしてゐるもんですから、ヂックもロンドンへ行つて見たくてたまらなくなりました。

さうしてゐるうちに、ある日大きな八頭立てのきれいな馬車がヂックの町へ參りました。八頭の馬はチリン〳〵と首の鈴をならしながら、きたならしい街だといはんばかりにいばつて通りました。ヂックはこれこそロンドンから來たのだらう、こんなきれいな馬車はロンドンでなければあるわけがないと思ひました。

馬車がある宿屋の前へとまつた時、ヂックは駆けつて行つて、馭者に言ひました。

『おぢさん、この馬車はロンドンから來たんでせう。僕ロンドンへ行きたいんですから、歸りにつれて行つてください。』

馭者はとつぜんのことゝて、始めはびつくりしましたが、だん〳〵身の上ばなしを聞いて見ると、この子供があはれな孤兒であることがわかつて、ともかくもつれて行つてやることにしました。

ヂックは馬車の隅つ子に小さくなつて、ゆれながらやうやうのことでロンドンへ着くことができました。

ヂックは田舎にゐた時、金貨を見たことがありました。そしてそれさへあれば、どんなにたくさんな物でも買へるのだと聞いてゐました。で、今黄金の舗石路を歩いて、黄金の一かけでも落ちてゐるものなら、拾つて自分の好きな物をたんと買つたり喰べたりしようと思つてゐました。

さて、ヂックは小さい足をどうしながら、ロンドンの街を歩きました。街から街へとくまなく歩きました。

歩いて歩いて歩きぬいた時には、日が西に傾いて街々はうす暗くなつてゐました。ヂックは黄金の舗石の代りに、塵や埃で一つぱいになつた路を見て、ぐつたり疲れて今はもう足を引きずるさへ大儀になりました。しかたなくある家の軒下に小さくなつて坐りました。そしてそのまゝぐつすり寢こんでしまひました。



あくる朝、眼がさめるともうひもじくて、ぢつとしてゐられませんでした。黄金の舗石のことも忘れて、パンの一かけにでもありつかうと思つて、ひよろ〳〵しながら汚い街をすみ〳〵に眼をみはつて、歩き出しましたが、ヂックの口に入れたいやうなものはもちろん落ちてゐませんでした。ヂックはたうとうがまんしきれなくなつて、往來の人々の袖にすがつて、

『どうか一錢めぐんで下さい。ひもじくてならないのです。』

と、哀れつぽい聲を出して頼んで見ました。しかし誰一人この少年乞食のために一錢のお金を投げてやる者もありませんでした。

『働け、働け、働いたらお金はひとりでに手にはひるんだのに、怠け者の小僧つ子。』

なかにはこんなことをいつて行く人もありましたが、たいていはふりむきもしないで、さつさと通り過ぎました。

慈悲も人情もないロンドンの人たちから、一かけのパンさへ貰へないので、ヂックはいよいよ困つてしまつて、歩くことさへできなくなりました。ちやうど大きな家の勝手口の前

へくたばつて、どうかしても一度田舍へ歸りたいと思つてしく〳〵泣いてゐました。

そこへこの家の女中が出て來て、ヂックを見るなり、

『おや、小さな乞食がゐること、こんなとこで何してゐるのだよ。あつちへ行くんだ。行かないと糞湯をぶつかけるぞ。』といつて頭からがみ〳〵どなりつけました。

ヂックがびく〳〵してゐるとこへ、幸この家の主人のフィツツーレンといふ人が歸つて來ました。主人は優しい言葉で、

『そんなとこで何をしてゐるんだ。お前も働かなくて喰つて行かうといふ横着者かな。』といひました。

『いえ〳〵さうではありません。働かうにも仕事がないのです。それにひもじくてどうすることもできないのです。』

ヂックはおそる〳〵いひました。

『おゝさうか、それは氣の毒なことだ。それでは何かお前にできるやうな仕事を與へてやらう。まあともかく家へはひるがいゝ。』と、主人は親切にいつてくれました。

かうして、ヂックはほんとうにいく日ぶりかで御飯をいただいて、その上この家でヂックにふさはしいやうな仕事を見つけて貰ひました。

ふとしたことから、ヂックには幸運な日が來ましたが、例の意地惡の女中がどういふものか、ヂックを叱つたり打つたりするもんですから、やつぱり苦勞が絶えませんでした。

そら火を熾せ、灰をかき出せ、薪を持つて來いのと、それからそれへと用事を言ひつけるので休む暇がありませんでした

『お前もつと親切にしてやらないと暇をやるよ。』

アリスといふこゝのお嬢さんが見かねてさういひますと、暫くはおとなしいのですが、また忘れたやうに虐めました。

それが日に日につのつてくるので、とても子供の身には我慢しきれなくなりました。そしていつとはなしに田舍が戀しくなりました。

たうとう萬聖節の朝早く主人の家を脱け出して、どん〳〵田舍の方へ駈けるやうにして歩いて行きました。さうしてホロウエーといふ所まで來ると少し足が疲れたので、そこの石に腰かけて休みました。これからさきどうしようかと小さな胸をいためて一心に考へてゐますと、ちやうどその時、教會の鐘が靜かにひゞいてきました。ヂックがぢつと耳をすまして聞いてゐますと、かういつてました。

もどれもどれウヰツチングトン
おまへは三度ロンドン市長になる身だぞ

ヂックは跳び上つてすぐと心をきめました。

『もどろ〳〵、今日からはどんな苦勞があつても忍ぶんだ。さうして三度ロンドン市長にならなければならないのだ。』

ヂックは心のうちでかういひながら飛ぶやうにもとの家へもどつて來ました。幸、家では誰もまだ起きてゐなかつたのでそのまゝせつせと働いてゐました。

ヂックの寢床は屋根裏のうす暗い室にあつて床でも壁でも穴だらけで、夜になると鼠が、『俺たちの室だ。』といつたやうに大勢でやつて來るので、とても眠れませんでした。

ある日この家へ來た紳士が、ヂックに靴を磨かせたお禮として一ペニィ(四錢)のお錢をくれました。この思ひがけない收入でふいに思ひついたのは、このお錢で猫を買つて鼠を追つぱらつてやらうといふことでした。

そのあくる朝、そつと暗いうちに起きて往來へ出て見ますと、ちやうど一人の小娘が猫をだいてくるのに會ひました。

『ねえ、君その猫を一ペニィで僕に賣つてくれない。』といつてかけあつてみますと、娘はこゝろよく賣つてくれましたので、ヂックは喜んで持つて歸りました。意地惡の女中に見つかつてはいかぬと思つて、屋根裏の室へかばつておいて、御飯などの殘りをないしよでやつてゐました。

それから鼠はすつかり來なくなりました。

この猫がどうして出世のもとになるのでせうか？（つゞく）

# 天の缺片

中島孤島

□登場人物

ちやほ子（牝鶏）
くろ吉（牡鶏）
五郎助（七面鳥）
文公（家鴨）
ぐう太（雲鳥）
こん作（狐）

〔舞臺は一面に牧稜後の野原の景。右手に豆殼な山のやうに積上げた畑があり、正面には遠かに百姓家の裏口が見えて、三四本の立樹には、大根なぞが掛干してある。
牝鶏のちやほ子が豆殼の山の方から駈出して來て、舞臺の中ほどで立どまると、まも吃驚したといふやうにきよろ〳〵と辺りを見



まはしながら、仰山な聲を出す

ちやほ子（牝鶏）『あゝびつくらした！　まア、何だらう？　どうしたんだらう？　誰かに來てもらはなくつちやア……誰か來て頂戴よう！　大變ですよう！

〔牡鶏のくろ吉が、この聲を聞きつけて、周章て樹の蔭から駈出して來る〕

くろ吉（牡鶏）『どうしたんだ？　ちやほさん！　どうしたんだよ！

ちやほ子（牝鶏）『何だか分らないが、大變なのよ！

くろ吉（牡鶏）『何だか分らない？

ちやほ子（牝鶏）『見ないんだもの、知れやうはないわ！　たゞ上から落つて來たのよ！

くろ吉（牡鶏）『何が落つて來たんだ？　え？　——お前はよつほどどうかしてゐるよ！

ちやほ子（牝鶏）『だつて、あたしはね、豆殼のお山の下で、彼が此方へ來いて歩いてゐたのよ、すると不意に、何か知らないが、お山の天邊から頭の上へ落つて來たものがあるの！　あたしは棒つきれか何かだと思つて、駈出して來たんですが、後で考へて見ると、何でももつと大きな、かちかちした——天の缺片のやうな物だつたわ！

くろ吉（牡鶏）『天の缺片！　冗談ぢやない！　そんなものが降つて來てたまるものか。

ちやほ子（牝鶏）『だつて、さうなのよ！　確にさうなのよ！

くろ吉（牡鶏）『だが本當に天の缺片が落つて來たとすれば、大變な事だよ！

ちやほ子（牝鶏）『さうですとも！　あたしもさう思つたの。だから、あたし、あんな大きな聲をして呼んだんだわ！

くろ吉（牡鶏）『ねえ、お前、本當に天が壊れかゝつたとすれば、かうしてはゐられないよ、天子樣に申上げなきやアなるまいよ。

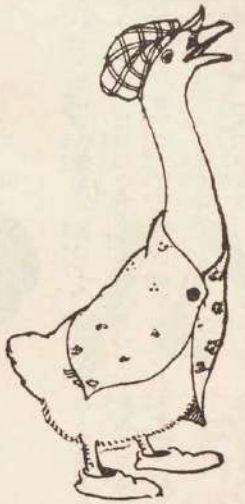
ちやほ子（牝鶏）『さうだわね！　ぢやア行つて申上げませうか？

くろ吉（牡鶏）『うむ！　さうしよう。これから直ぐ申上げに行かうよ。だが、待てよ、その前に一つ関をつくつて、みんなに事の起つたのを知らせて置かうよ。

ちやほ子（牝鶏）『さうね！　あたしも一しよに啼くわ！

〔牡鶏がコケコーコ、と大きく啼くと、牝鶏もコ、、、コーと後をつけて啼く〕

くろ吉（牡鶏）『さア、これでいゝ！　直ぐに立たう。



（この時藪の方で呼ぶ聲がする）

聲。オーイ！　くろ吉さあん！　ちやほ子さあん！」

くろ吉（牡鷄）「文公の、鈍物が來た。

（家鴨の文公がよたくと短い脚で駈出して來る）

くろ吉（牡鷄）「やア、文さん！　何か用事かえ？

文公（家鴨）「おいらは今あそこで晝寢をしてゐたんだが、あんまり暑くつて、氣持が惡いから、遊びに來ようと思つてゐたところなんだ。お揃ひで何處へ出掛けるの？　一しよに行かつか？

くろ吉（牡鷄）「だが、君、今日はいつもの散歩ぢやアないんだよ。

ちやほ子（牝鷄）「本當なのよ、文さん！

文公（家鴨）「ぢやア、何處へ行くの？

くろ吉（牡鷄）「天子樣へ申上げることがあつて都まで行くのさ！

文公（家鴨）「天子樣のとこへ！　な、な、何が出來たんだえ？

ちやほ子（牝鷄）「それは大變な事が出來たんだよ、文さん！

くろ吉（牡鷄）「大きな天の缺片が、家のちやほの頭へ落つて來て、もう少しで潰されるところだつたのさ。

文公（家鴨）「やア、それは大變だ！　それぢやア、成程天子樣に申上げなきやアなるまい——おいらも一しよに連れてつておくれよ！

くろ吉（牡鷄）「それはいけない！　お前にそんな遠路が出來るもんか！

文公（家鴨）「なに、出來なくつてさ！　腹が減つたら、途中で蚯蚓や蜥蜴なんかのゐさうな場所を捜して行くから大丈夫だ。一しよに行くよ。

くろ吉（牡鷄）「ちやア行くがいゝ。支度はいゝのかい？



文公（家鴨）「まア一つ啼いて、みんなにおいらのゐる處を知らせて置かう！

（家鴨の文公は長い頸を眞直に伸して、力一ぱいにギヤアと啼く）

さア、これでいゝ！　出掛けるとしよう。

（三人が羽拂きをして、歩き出さうとすると、横の方で誰か呼ぶ聲がする）

聲「オーイ！　くろ吉さあん！　ちやほ子さあん！　文公やあい！

くろ吉（牡鷄）「また誰か來た。そんなに手間取つてはゐられないのに！

文公（家鴨）「ぐう太の阿呆だ！

（この時鶯鳥のぐう太が、長い頸を突出して、のそくとやつて來る）

ぐう太（鶯鳥）「やア！　みんな居たね。おゝ、文公！　先刻からお前を捜してゐたんだよ。

くろ吉（牡鷄）「ぐう太さん！　何か用かね？

ぐう太（鶯鳥）「おいらはみんなが何をしてゐるか知りたかつたんだよ。何てまア薄氣味の惡い日なんだらう！　路もなにもからくになつちまつて、往來を歩く者なんぞありやしない。

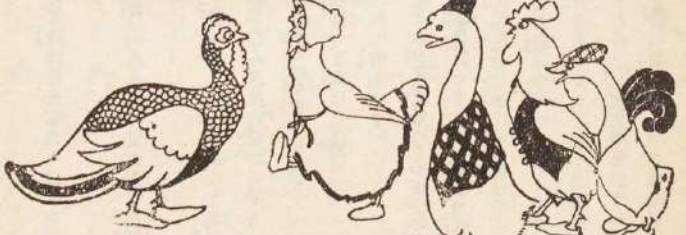
文公（家鴨）「おい！　氣の毒だが、君と話してる暇はないよ。これから天子樣へお目通りに行くんだから。

ぐう太（鶯鳥）「嘘をいへ！　お前にそんなことが出來るものか。それとも何か變つた事でもあるのか？

文公（家鴨）「大ありのこんくちきよ！君はまア何と思ふ？

くろ吉（牡鷄）「ぐう太さん！君は家のちやほ子の頭へ何が落つて來たと思ふね？

ぐう太（鶯鳥）「樣賣か、それでなきやア栗だらう。



文公（家鴨）『栗？　そのくらゐなものなら、何でもありやァしないよ。君それどころの騒ぎやァないんだ。天の缺片なんだよ。青い空の、かち〳〵した、大きな塊が、ちやほ子さんの天邊へドシンと落つて來たんだ、もう少しで潰されるところだつたのさ！

ぐう太（鶯鳥）『まァ、危ねえ！　巡査さんに訴へればよかつた。

くろ吉（牡鷄）『だから、天子樣へ申上げに都まで行くところなんだよ。あの方に申上げなきやァなるまいと思ふのさ！

ぐう太（鶯鳥）『さうとも！　直ぐに行く方がいゝわ！　何と仰しやるか、おいらも一しよに行つて見たいなァ行つてもいゝかね？

くろ吉（牡鷄）『いゝとも！　だがね、途中に水溜りがあつても、ぴちやぴちややるのは御免だよ。

ぐう太（鶯鳥）『大丈夫！　用に行く時はそんなことはしないよ。

くろ吉（牡鷄）『そんならこれから出掛けよう！

ぐう太（鶯鳥）『若し途中で敵にでも出逢つたら、こんな風に啼いてやらう

（ぐう太は長い嘴を差上げながら、ガアガアと續けて五聲ばかり啼く。）

さア、これで宜しい！

（牡鷄のくろ吉は、牝鷄のちやほ子の手をとり、鶯鳥のぐう太は、家鴨の文公と手を引かれて、揃つて出掛けようとすると、又藪の方で呼ぶ聲がする。

聲『くろ吉さあん！ちやほ子さあん！

ぐう太やあい！　文公やあい！

くろ吉（牡鷄）『おや〳〵、これではとても都まで行かれさうもない！



ぐう太（鶯鳥）『あれは七面鳥の五郎助さんだよ！

（七面鳥の五郎助老人が咽喉をゴロ〳〵鳴らせながら出て來る）

五郎助（七面鳥）『はッ！　はッ！　みなさん、御機嫌よう！おッほ！　あッは！　お揃ひで何處へ遊山に行かつしやる？

くろ吉（牡鷄）『遊山どころぢやァない！　大切な用事が出來て、都へ出ようといふんです！

五郎助（七面鳥）『いやに勿體をつけなさるが、全體何がおッ始まつたのです？

ぐう太（鶯鳥）『あなたはまだ知らないんですか？　それは大變な事が起つたんです！

ちやほ子（牝鷄）『あたしがね、豆殼、のお山の下になりましたら、天が半分ばかり缺けて、落つて來たんですよ、ですからこの次には、どんな事が始まるか分らないと思ふんですわ！

五郎助（七面鳥）『成程、それは大事件だ！　さうするとこの次には後の半分が落て來るだらうといふんだね？

くろ吉（牡鷄）『全くさうです！　それで心配してゐるんです。ですから天子樣に申上げて、どうしたらいゝか伺つて來ようと思ふのです。

五郎助（七面鳥）『それがまァ一番よからう！　ではわしも御一しよに行つて、說明してあげよう。おッほ！

くろ吉（牡鷄）『あなたのやうに御老體で、それにさう肥つてゐらつしつちやァ、遠路は御苦勞でせう？

五郎助（七面鳥）『肥つとる！　あッは

肥つとつて歩けまいといふのかい？　まア見てゐなさい！　いまにわしの値打を見せて上げるから。そして直に天子様にお目通りがかなふやうにしてあげる。我々が出立のしるしに、まづかうやつて咽喉を鳴らして置かう。

（七面鳥の五郎助は、しやんと立つて、咽喉をゴロ〳〵と鳴らす。これでよい！

（といつて五郎助が先頭に立つと、一同は前のやうに手を振り合つてその後へ續く。すると背後の方で又呼ぶ聲がする）

聲『待つた！　待つた！　みなさん、一寸待つて下さい！

文公（家鴨）『おや！　こん作さんだよ！

ちやほ子（牝鶏）『あの方が來ても大丈夫ですか？

五郎助（七面鳥）『心配はいらない！　我々がかう揃つて居れば、何が來たつて大丈夫だ！　おッほ！　あッは！

（この時狐のこん作が、わざとにこ〳〵と笑顔をつくりながら近づいて來る）

こん作（狐）『やァ！　今日は！　大さうお揃ひですな！　どちらへ？　おたのしみですか？

くろ吉（牡鶏）『いゝえ！　どう致しまして、愉快どころぢやアないんです、大事な用が出來て、都へ行くところなんです。

こん作（狐）『へえ、都へいらつしやるんですか？

ぐう太（鷲鳥）『えゝ、本當なんですよ！　天が綻びてばらばら落つて來るんです。

文公（家鴨）『豆殻の下にゐなかつたら、ちやほ子さんは潰されちまつたんです。

こん作（狐）『まア、それは險呑ですな！　どうしたらいゝでせう？

くろ吉（牡鶏）『ですから、天子様へ申上げに行かうと思ふんです。

こん作（狐）『あゝ、さうですか。それは丁度よかつた！　實はわたくしも都へ行くところなんです。

文公（家鴨）『それは本當ですか？

こん作（狐）『本當ですとも！　わたくしは都へ出る近道を知つてますが、それを行けば、半分の時間もかゝらずに行けるんです。わたくしが御案内しませう。

くろ吉（牡鶏）『それぢやア、どうぞその近道を教へて下さい。



一分の時間でも大切な時ですから。

こん作（狐）『全くです。なに一本道ですから、間違ほうたつて、間違へつこはありません。こゝを眞直に出ますと、右の方に暗い路が見えます。一寸見ると洞穴の入口のやうですが、確かに都まで通つてゐるのです。そのはづれに天子様がゐらつしやるのです。

五郎助（七面鳥）『あゝ、それは素的だ！　おッほ！　あッは！

こん作（狐）『ではあなた方はお先へいらしつて下さい！　わたしが總をします。獅子でもついて來るといけませんから。

くろ吉（牡鶏）『ぢやア列をつくつて出掛けるとしよう。

（めい〳〵にそれ〴〵の嘴擦をして、一同が上手へ入ると、狐のこん作はひとりぎりになつて、しめたといふやうな顔をして、四邊を見廻し、そして張躍をしながら續いて入る。暫くすると奥の方でいろ〳〵な嘴擦が、一しよくたに聞えて、またばつたりと黙んでしまふ。と、狐のこん作は、全身を羽毛だらけにして上手から現れて、嬉しさうに踊りながら舞臺を通り過ぎるが、今度は下手からまた引返して、舞臺の中央まで來て立停り、滑稽な身振で演說を始める）

こん作（狐）『諸君！　わたくしの計略は、實に巧妙なものであります。木の上から梨をばら〳〵と落したところが、世間見ずの牝鶏が天の破片が落ち來たといつて騒ぎたてました。それから後は皆さん御存じの通り、彼等は喜んでわたくしのお腹の中へ入つてしまひました。併しちやほは肉が軟かで、美味うございましたが、その他は、實の所、みんな硬くつていけませんでした。

（幕）

傳說

# お菊池物語

藤澤衛彦

昔々、上野國に、小幡上總介といふ、剛腹持ちの我儘者の惡殿樣がありました。夜も夜も草木も眠る二三時頃になつて、御飯が食べたいとおほせらるゝので、御膳部の役人達は大まごつきにまごつきました。それでも、やうとの事で、御膳をとり揃へて、お給仕をして、いざ差上げようといふ段取になりましたところ、肝心のお給仕のお女中が、皆ぐうぐう眠り込んでしまつてゐて、どうしても起きないといふので、また〳〵當直のお役人方は大層な心配、漸くのことで、たつた一人起きてゐた、奥方づきおそば仕へのお菊どのを頼んで、お給仕に出てもらふ事になりました。

お菊どのは、お城で一番美しい可愛い お女中さんでしたが、そのうへ、視野行だといふので、上下ともに評判のいゝ人でした。今も今とて、お母さんに贈らうと心掛けました小袖を、夜の目も寝ずに縫ひ直してゐましたところを、殿樣のお給仕に駆まれましたのですが、別にめんどうな樣子もせず、素直に行つてあげる事に致しました。ではと急かれましたので、お菊も少しあわてゝ縫針を一本ひよいと襟に挿したまゝでお給仕に出ましたそれが大變な問題の原因にならうなどとは何で思ひ及びませう。お菊は、うや〳〵しくささげて、御膳を殿樣の御前に運びました。と其時、どうしたはづみか、襟に挿して置いた縫針が、音もしないで御膳部の胡麻汁の中へ滑り落ちました。お菊は、それにほちつとも氣がつきませんでしたので、そのまゝ御前に据ゑて後にすさり、其處に行儀正しく控へてなりました。

殿樣は、見馴れない女中であるわいと、意地惡さうにお菊を眺めながら、まづ例の汁椀を取上げられて、箸で一遍、ぐる〳〵とかきまはされますとかちりと、當つたものがあります。挾み上げて見ますと縫針でしたので大層な御立腹。

『曲者、曲者だ。汝は我に針を呑ませて殺害しようと計略んだな。……いや辯解ならぬ。ふとゝき者奴が。誰かゐるか、此奴を蛇責めに致せ。』

と、亂暴にもお菊を桶の中に押込め、蓋をした上、その蓋に小い穴をあけさせ、翌日になると、近所の山から澤山の蛇を集めさして穴から桶に移さしましたので、お菊は狂氣のやうに泣き叫びましたが、たうとう許されないで、穴に捨てられた上、寶龍寺山の奥山の池の中に投込まれてしまひました。

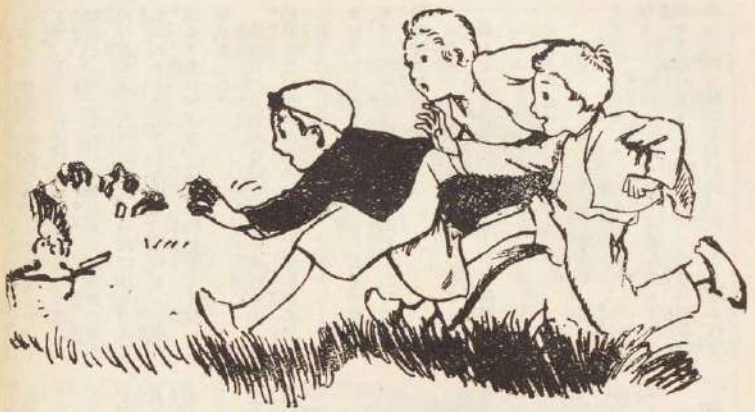
それから暫くして、此池のあたりを通り合しましたのは、狩の戻の若侍でした。何處かで女の泣叫ぶやうな聲がしますので、ふと見あこすと、池の中にぽつかんぽつかん一個の桶が浮いてゐて、其處から聲がするやうなので、弓で掻寄せて、桶の蓋を打破つてやりましたところ、蛇かぞろ〳〵と飛出しました。驚いて見てをりますと、次でお菊も桶の中から現はれて、

『お助け下さいましてありがたう存じます此御恩は永く〳〵忘れませぬ。お名前をお聞かせ下さいまし。』といふので、侍が『小柏源介と申す。』と答へますと、

『貴殿のお家は萬代繁昌でございます。』と言ひながらお菊は身を躍らして、池の中に沈んでしまひました。

此話を傳へ聞きました お菊の母親は、大層小幡の殿樣を怨み、或日、山の池にやつて來まして、

『お菊や、お前に襟があるなら、私が今此處へ蒔く煎胡麻に芽を出しておくれ、これはお前が針を落した胡麻汁に使つた殘りの煎胡麻だよ、私はお前の一念が小幡殿へ祟りすることを許します。』と言つて、さめ〳〵と泣きました。それから三日經つてお菊の母親が來て見ますと、立派に煎胡麻から芽が吹いてゐたといふ事で、それから此池の邊には今でも自然に胡麻の生える事が絶えないといふ事でございます。（上野の話）



# 歌娘

田中光霜

## 三

人間はどんなに好きな事でも、どんなに樂しい生活でも、毎日同じい事を續けてゐると飽きて來るものです。歌娘もその通りで、好きな歌を歌つて贅澤な生活をしてゐましたが、そろ〳〵飽きてまゐりました。そして、しきりと村へ殘して來たお祖父さんのことが考へられるのでした。「わたしのゐなくなつた後で、お祖父さんはどんなに落膽してゐるでせう」と考へて見ますと、自分ばかりがこんなに毎日樂しく暮してゐることが、本當にすまないやうに思ひました。

或日、思ひ切つて女王樣に、

『どうぞ私を村へ歸へして下さい。』とお願ひして見ました。

すると女王樣は、

『お前がそれ程歸りたいのなら歸して上げる。その變りお前は、一度このお城へ入つたからは、このお城の者だと云ふことを忘れてはいけないよ。それから、歸りは來た時と同じやうに小鳥にしてやるが、獨りで飛んでゆきなさい。そしてお前は、一週間の後には屹度此處へ歸つて來なくてはいけない。もし歸つて來ない時はお前か、お前のお祖父さんかゞ、ひどい目にあふと思ひなさい。それが約束出來れば歸してやる。いゝかい、わかつたかい。』

『はい。』と歌娘は答へましたが、何んとなく情けないやうな氣が致しました。けれども今はたゞ〳〵歸りたい一心なのですから、何も彼も承知して村へ歸して貰ふことになりました。

その晩は暫くの別れだと云つて女王樣を始めとしてお城の人達が集つて宴會を開きました。そして、歌娘にも幾つもの歌を歌はせました。

歌娘は翌朝早く起きて、女王樣や皆さんにお暇乞ひをして來た時の粗末な着物に着更へて門の外へ出ました。すると、もう、いつの間にか、歌娘は一羽の綺麗な小鳥になつてゐました。歌娘の小鳥は喜び勇んで、高い、青い空に飛び上りました。その日は風もなく靜かだつたので、飛んで行く氣持は何んとも例へやうもないほどいゝものでした。

やがて、幾つもの森も越え、幾つもの谷を越え、幾つもの山を越えて、その日の夕方、やつと村はづれの森まで着きました。歌娘は慣れないことをあまり一生懸命にやつて飛んで來たものですから、村の森へ着いた時には、もうこの上は飛ぶことが出來ない位疲れて了ひました。それでも村の中程の小川のほとりに、自分の家が見えた時は、どんなに嬉しかつたでせう。

歌娘の小鳥は、木の枝に一寸止つて休んでゐましたが、もう村へ來たからには、土の上へ降りて元通りの歌娘の姿にならうと思つて、木の上からひよいと地の上に飛び降りました。所がどうでせう。小鳥はやつぱり小鳥で、人間らしい形には變りません。歌娘は『おや、おや』と思ひました。そして幾度も上の上に體や羽を擦り付けて見ました。それでも小鳥は矢張り小鳥です。今は歌娘も泣き出して了つて、泣きながら土の上を轉げて歩きました。

すると、遠くの方で子供のがや〳〵云ふ聲がしたかと思ふと、二三人の子供が馳けて來ました。

『あーれ、綺麗な鳥がころ〳〵してらあ。』

『棒でひつ叩いちまへ。』

『捕まへろ。』

などと云ふ聲が聞えましたので、歌娘は驚いて飛び上らうとしましたけれど、疲れてゐる上に、先刻から體を擦りつけ

たり轉んだりしてゐたものですから、二三度ばたゝしして見ましたが羽が痛んで飛ぶことが出來ません。仕方がないのでぢつと縮まつてゐると、悲しさが胸に込み上げて來て涙がほろ〳〵と流れました。

『おい君、この鳥は涙をこぼしてゐるよ。』

『可笑な鳥だなあ。』

『どうしたんだらう、可哀さうだね。』

子供達は、日々にさう云ひながら近づいて來て、その中の一人は歌娘の小鳥を掌の上へ乘せました。歌娘はもうどうせ殺されるものだと思つて觀念してゐました。

すると其處へ、森の中から薪を背負つて出て來た人がありましたが、ふと見ると、それはなつかしいお祖父さんではありませんか、歌娘は飛び立つ程喜んだが、小鳥になつてゐる情なさには『お祖父さん』と云つて呼びかけることが出來ません。それでも歌娘の小鳥は『ぴい〳〵〳〵』と三聲ばかり鳴きました。

すると、お祖父さんは子供達の所へ近よつて、

『おや〳〵、お前達はまた小鳥を捕まへて惡戯してゐるな。そんなに生物をいぢめると神様の罰をうけるぞ。』

『小父さん、そりや違ふよ。その鳥がね、どうしたんだか、苦しがつて地べたにころ〳〵してゐたの。』

すると、もう一人の子供が云ひました。

『小父さん、この鳥はほろ〳〵涙をこぼしてゐたよ。』

『ほんたうかい。』とお祖父さんは云つて『どれ〳〵その鳥を俺に見せなさい。』と、歌娘の小鳥を手に取つて眺めました。

『ほう、これはまた珍らしく綺麗な鳥だ、何んと云ふ鳥か知らん。』

お祖父さんはその時娘のことを思ひ出しました。もう三月も前にゐなくなつたつきり、死んだことやら生きてゐることやら判らない、あの娘は、村の人達からは綺麗だ〳〵と云つて讃められたつけが……さう思つてお祖父さんは、急に悲しくなり思はずほたりと一滴歌娘の頭の上に涙を落しました。

歌娘の小鳥は『お祖父さん、その娘はこの私ですよ』と云ひたいのですが、聲も出ません。仕方がありませんので、また『ぴい〳〵〳〵』と鳴いて、頭をお祖父さんの胸に擦りつけました。

『おう〳〵、可哀さうにこの鳥はきつと病氣に違ひない。』と云つて、子供達に向ひ、

『お前達これを小父さんにくれないか。その變りお前達に、明日山へ行つてたんと苺をとつて來てやる。』

『あゝ、小父さん、あけるよ。』と三人の子供は揃つて云ひました。

お祖父さんは、胸懷中からいくらかのお錢を出して子供達にやり、歌娘の小鳥を懷中へ入れて家に歸りました。

## 四

お祖父さんは、歌娘の小鳥を家へ連れて歸つてぬるま湯で體を洗つてやり、籠の中へ枯草で巣を作つてやりました。そしてパンを細かく千切つて籠の中へ入れてくれました。

翌朝になると、歌娘の小鳥はすつかり元氣になりました。

『お祖父さん、お祖父さん。』と聲をかけて見ましたが、お祖父さんには小鳥の言葉がわかる筈がありません。仕方がないので、美しい聲で鳴きました。するとお祖父さんはほく〳〵

喜んで、

「お前は分いゝ聲で鳴くね。これからはお前と一緒に仲よく暮さうよ。お前に云つたつて解るまいが、俺の孫娘に歌の上手な綺麗な娘がゐたのだよ。それがね三月ばかり前に森の小鳥に誘はれたとかで、行方知れずになつて了つたのだ。それで、俺は毎日つまらなくて仕事をする張り合もなくなつたのだ。だがこれからはお前と一緒に仲よく暮さうよ。さうさう俺の孫娘は皆んなに歌娘と云はれてゐたから、お前を俺は歌鳥と名付ようよ。」

お祖父さんはさう云つて獨りでにこ〳〵してゐました。歌娘は歌鳥にされて情なくなりました。そして、花の御殿の女王樣がきつと自分に惡戯して、人間になれないやうにしたのに違ひないと思ふと、口惜しくて堪りませんでした。然し、今更仕方がないので、毎日小鳥の歌を歌つてお祖父さんを慰めたり、自分でもせめてもの樂しみとしてゐたりしました。

そのうちに一週間目の日が來ました。歌娘は花の御殿の女王樣との約束を思ひ出しましたが、今は籠の中へ入つてる身ですからどうすることも出來ません。お祖父さんに云はうとしても言葉が通じないので云ふことも出來ません。女王樣はもし一週間目に歸つて來なければ、ひどい目にあはせると云つたが、一體どんなことになるのだらうと、歌娘は心の中でびく〳〵してゐました。そして、どうせ自分は小鳥になつて了つたのだから、禍があるのなら自分の方がいゝ、殺すのならどうかお祖父さんを殺さずに私を殺して下さい、と心の中で女王樣にお願ひしたりしてゐました。

一週間を過ぎた二日目の夕方でした。お祖父さんは五六人の村の人達に擔がれて、家の中へ連れ込まれて來ました。見ると大變な怪我をしたらしいのです。

「何しろお前、あの三丈もある屋の上から落ちたんだからな、ひどい怪我だよ。」

「助かりさうかね。」

「さうだな、どうも見込がないよ。俺が彼處を通つた時は、お爺さんが落ちてからかなり時間が經つてゐたやうだからな。」

「さうかなア、どうぞして助かつてくれゝばいゝが。」

村の人達は心配さうに交る〴〵話をしてゐました。そして可哀さうな獨り者のお爺さんだと云つて、皆んなで介抱して

やりました。

「こんな時あの歌娘さへゐればなア。」

と一人は嘆息をつきました。

「ほんとだっ」

と、誰も彼も云ひました。歌娘は籠の中でそれを聞いてゐてどんなにつらかつたことでせう。涙をほろ〳〵流して、神樣にお祈りをしました。

「神樣、神樣、どうぞお祖父さんを助けて下さい。」

と幾度も〳〵繰り返しましたけれど、お祖父さんの傷は肋骨を折つて居り、頭を打つて居ましたので、たうとう氣絶したまゝ正氣に返らずにその夜死んでしまひました。村の人達は大層悲しんで皆んなでお金を出し合つて、翌日お葬式をして

くれることになりました。

その日、歌娘の小鳥は悲しい〳〵聲で、悲しい〳〵節の歌を歌つてゐましたので、村の人達が、可哀さうだと云つて籠から出してやりました。

やがてお祖父さんを入れた棺が、多くの村人に送られて墓場の方へゆきました。

歌娘の小鳥は、悲しい聲で悲しい節の歌を歌ひながら、その上を飛んで行きました。

送つてゆく人達の中には、こんなことを話し合つてゐる人もありました。

『あの綺麗な歌娘はどうしたんだらう。』

『きつと花の御殿とかへ行つたのだらうよ。』

『そして、お祖父さんのことは忘れて了つたのかねえ。』

『贅澤な暮し方を覺えちや、村の生活なんぞはいやになるからなア。』

『でも花の御殿とかへ行つたかどうかさへ、よく解らないぢアないか。或は森の中で狼にでも食はれて了つたのかも知れないよ。』

『どうも解らんね。』

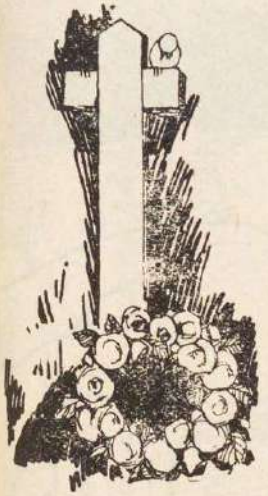
『何にしても不孝者だよ。』

そんなことを話してゐるのを聞いてゐる娘は身を千切られる樣な思ひでした。

村の人達はお祖父さんを埋めて、牧師さんはお祈りをし、形ばかりの十字架をその上に立てゝ、皆んなは歸つて行きました。

けれども、歌娘の小鳥はその十字架の上にとまつて、いつまでも〳〵悲しい〳〵聲で、悲しい〳〵節の歌を歌つてゐました。

（をはり）

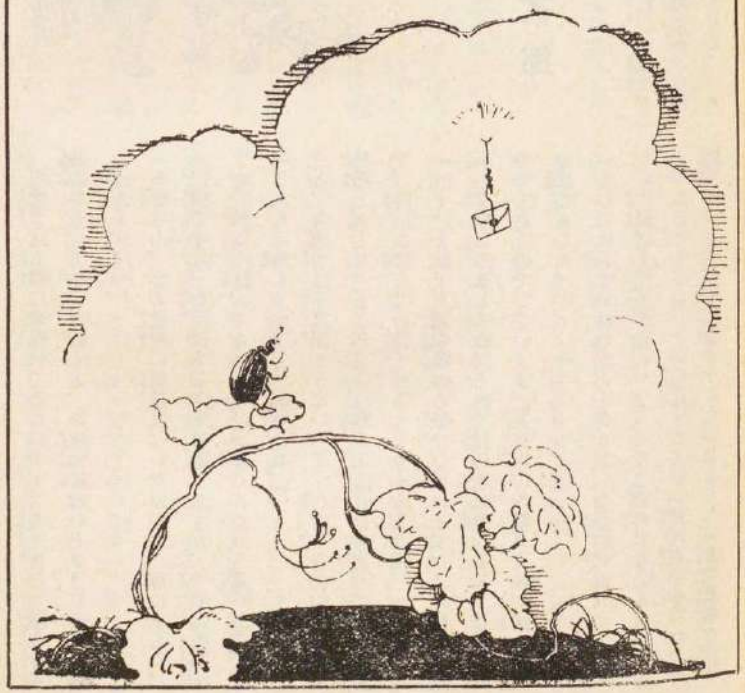




# 草の實（童謠）

湯木ますみ

絮毛の生えた
草の實は
どこから飛んで來たのやら
風にゆら〳〵
飛んでゆく
絮毛の生えた
草の實は
どこまで飛んで行くのやら



# 村の鎮守様

齋藤佐次郎

## 一

ある時、信州の飯山村といふところを武者修行のお武士が通りかゝりました。丁度冬の夕方でしたが、道端に小さな茶見世があつたので、お武士はそこの縁臺に腰みました。

お武士は大變に草臥れてゐたのです。茶見世のお婆さんが澁茶を入れて持つて行くと、お武士はおいしさうにそれを飲みながら、

「お婆さん、この近所に宿屋はないかね。」と、尋ねました。

「左樣ですな、宿屋はあることはありますが、今日はお祭ですから何處も休んでをります。」お婆さんがかう答へたので、

「こんなに淋しくつても、お祭かね。」

と、お武士は不思議さうにいつて、村の中をあつちこつち見廻しました。ところ〴〵に幟がしよんぼり立つてゐるだけで、外にお祭らしい樣子がちつともありません。

「ハイ、これでも鎮守樣のお祭でございます。この村の祭は少し譯がありましてね、それで村の者は遠慮して、ひつそりやつてゐるのでございます。」茶見世のお婆さんは、沈んだ聲で話しました。

「それには何かいはれがあるのかい。お祭は何處だつて賑やかに大騒ぎしてやるのに、どうしてこの村だけこんなに淋しくやるのだらうね。その遠慮するといふ譯は何の事だね。」お武士はいよ〳〵不思議さうにたづねました。「私は諸國を武者修行して歩く者で、困つてゐる人があれば、助けてやるのを修行にしてゐるのだから、その譯といふのを是非話してくれないか。」

さういつて、お武士が頻りと頼むものですからお婆さんはたうとう次のやうなお話をいたしました。

## 二

お婆さんが話したところによると、この村の鎮守樣といふのは「人見明神」といつて、裏山の奥にありました。そして、毎年一度のお祭には氏子の中から一人づつ年ごろの、綺麗な娘が人身御供に上がるのです。お祭の三日前にはその家の棟に白羽の矢が立ちます。すると、どんな事情があつても、その家の娘は鎮守樣の人身御供として犠牲に上げられなければならないのです。それを怠ると、その年はきつと祟があつて、村中が大荒れに荒れて一粒の收穫もないと言ひ傳へられてゐました。

ですから、お祭といつてもその日は村の人達のためには悲しい日です。はしやいで騒ぐ者は一人もありません。可哀さうな娘や親達のために遠慮して、商賣は一切休んで皆なひつそりしてゐるのでした。

お婆さんの話は大體かういふのでした。お武士はぢつと何か考へながら聞いてゐましたが、決心した事があるやうに、

「お婆さん、今夜の人身御供を出す家は何といふ家かね。」とたづねました。

「その家は向ふの樹の中に見えるあの白壁の家でございます今夜の巳の刻(十時)には娘のおつやさんは村の人達につれられて鎮守の森へ行くのです。ほんとに兩親の身になつたらどんなに悲しいでせう。今頃はきつと家中で泣いてゐることでございませうよ。」

さういつた時、お婆さんは涙をこぼしてゐました。

お武士は立上りました。そして、いくらかのお金を置いて、急ぎ足に木立の中に見える白壁の家の方へ歩いて行きました

## 三

名主の庄右衛門の家では一家中の者が奥の一と間に集つて今年十七になつたおつやといふ娘を圍んでおい〳〵泣いてゐました。その晩人身御供を出す家といふのはこの庄右衛門の

家でした。三日前に白羽の矢が家の棟に立つたので、金ですむことならどんな事でも出來る身分ですが、そればかりはどうすることも出來ないので、庄右衛門夫婦は可哀さうな娘を圍んで目を泣きはらしてゐます。おつやは庄右衛門のたつた一人の子供でした。

『あゝ〳〵、もう日が暮れた。お前と一しよにゐられるのももうしばらくの間だね。』

庄右衛門はさういつて、泣きました。

と、その時、庄右衛門の家の玄關先きに一人の見なれない若武士が來て、

『頼みます。頼みます。』と、いひました。

この若武士といふのは、今しがた茶見世を出て行つたあの武者修行のお武士でした。

誰かと思つて、下男が出て行きますと、

『私は諸國を武者修行して歩く者ですが、どうか御主人にあはせて下さい。』と、お武士がいひました。

下男は困つた顔をして、『今日は家に取込みがありますから また今度來て下さい。』と、答へましたが、どうしてもお武士が承知しないので、奥へ行つて庄右衛門にその事をいひますと、

『この取込みに困つた男が來たものだな。主人は大變に取込んでゐて手が離せないから會はれないといつておくれ。』と、庄右衛門がいつたので、下男はもう一度お武士のところへ行つて、主人の言葉を傳へました。

『どうしても會はれないといふのなら仕方がありませんが、私はあなたの家で今夜娘さんを人身御供に出すといふのを聞いて、出來ることなら助けてあげたいと思つて來ました。もう一度主人にさういつて下さい。』

お武士がかういつたので、下男は驚いて主人を呼びに行きました。庄右衛門はお武士の親切をどんなにうれしく思つたでせう。すぐ出て來てあいさつをしました。

『私は、今日、はからず此の村を通りましたところが、向の茶見世のお婆さんからあなたの家の話を聞いて、自分の力で出來ることなら何とかして上げたいと思つて來ました。』

お武士がかういつた時、庄右衛門は目に一ぱい涙をためてゐました。庄右衛門はお武士に草鞋をぬがせて奥座敷へ案内した。

お武士が奥座敷に靜かに坐つた時、庄右衛門は自分の一家にふりかゝつてゐる悲しいお話をしました。

『丁度、三日前のことでございますが。今年の白羽の矢は私の家の家根へとんで來て刺りました。この矢が立てばそこの家の娘は人身御供に上らなければなりません。まして、私は村の名主をつとめて居りますから、自分から娘が可愛いといつて、それを惜つては村の者のしめしもつきません。それに、もしこの犠牲を鎮守様に上げない時は、それこそ村が荒れて粟一粒もとることが出來ません。ですから、これだけは人の力ではどうにもいたしようがありません。御親切はまことに有難うございますけれども、神様のなさる業ですからお助けを受けることも出來ますまい。』

庄右衛門は悲しさうにいつて、涙をぬぐひました。

『はつはゝゝゝゝゝ』

お武士が不意に笑出したので、庄右衛門はびつくりしてお武士の顔を見ました。

『庄右衛門さん、決して心配なさることはありません。私がさういふ悪い神様ならひどい目にあはせて上げます。』

お武士が平氣でいつてゐるので、庄右衛門はいよ〳〵びつくりしました。

『いゝえ、そんな事をなさつては大變です。それこそどんな神様のお祟があるか知れたものではありません。どうぞ、そんな亂暴なことはなさらないで下さいまし。』

庄右衛門が心配してとめるので、お武士はます〳〵面白さうにいひました。

『ナニ、さう驚くことはありません。それより先づお尋ねしますが、この村の鎮守様だといふ「人見明神」は何様を祭つたものですか。』

『何様か存じませんが、襄山の奥の奥にありまして、まことに淋しいところですから平生はこわがつて人が參りません。お社は幾年にも建てかへたことがありませんから、荒れはてたまゝになつてをります。それに、昔からそのお社へ入つたものは癩を病ふといはれてゐますので、入つた者もございません。』

『ウン、それで分つた。』

お武士はうれしさうにポンと膝を打ちました。

『あなた方が神様だといふのは、それは本當の神様ではない。お社といふのは魔物の住家に違ひありません。私が今夜、娘さんに代つて人身御供となつて行つて、その魔物を退治て村の難儀を救つてあげませう。どうか何にもいはずに私にまかせて置いて下さい。』

お武士がそれから尙、いろ〳〵話したので庄右衛門は成程と合點が行きました。それにお武士の樣子を見ますと、年こそ若いが、如何にも武勇に優れた人のやうですし、可愛い娘が救へるなら、自分の命さへ捨てたいと思つてゐたところですから、どんな成行になるか、お武士のいふ通りにまかさうと決心しました。

そこでお武士と庄右衛門との間にいろ〳〵と細い相談が出來て、村の人達には一切この事を知らさないようにして、娘のおつやさんは別の間にかくして置き、お武士が代つて犧牲を入れる白木の箱に入つて行くといふことになりました。

『こんなにも御親切にして下さるあなたは一體、何といふお名前の方ですか。』

終ひになつて、庄右衛門がたづねました。

『私は中國の浪人で、岩見の重太郎と申す者です。』と、お武士が答へました。

## 四

やがて、巳の刻(十時)になつたので、村の人達が提灯を片手に持つて、ドヤ〳〵庭先きへ入つて來ました。みんな庄右衛門夫婦の顏を見て、氣の毒さうにしてゐました。

『綺麗なおつやさんだつたが、本當に惜しいもんだ。』と、いつてゐる者もありました。

間もなく、その晩の人身御供を入れた白木の箱が〆繩を張られて緣側へ運び出されたので、村の人達はそれを肩にかついで、庄右衛門の家の門を出ました。誰一人口をきく者がありませんでした。みんな默つて、靜かに鎭守の森を指して歩きました。

いよ〳〵山道へさしかゝつた時、二本の松明がともされました。その灯を先頭にして、犧牲を持つた行列は進んで行きました。月のない眞暗な晩でした。

松の大木がすく〳〵と並び立つてゐる山道を二十町も上つた時、「人見明神」の社へつきました。村人はかついで來た箱を靜かに下して、社の前に据ゑました。

『さア、おつやさんや、これでお別れだよ。鎭守樣に唯べられて下さいよ。村の者一同が頼みますぞ。』

年をとつた一人の男が、箱の中に向つていひました。それから、一同の者は一と團になつて後も見ずにとつとと山道を下つて行きました。

## 五

夜はだん〳〵更けて行きました。物音一つしません。箱の中の重太郎はぢつと身構へて息をこらしてゐました。もう眞夜中頃でした。

すると、その時、どこからかゴーッと物凄い風の音がして俄かにあたりの草や樹がザワ〳〵〳〵と搖れはじめました。

と、不思議な足音がします。それはたしかに社の中から何者か出て來る樣子です。重太郎はいよ〳〵魔物が出て來たのだと思つて、刀のつかに手をかけました。

バリ〳〵。バリ〳〵。バリ〳〵。箱の蓋が凄い音を立てゝ噛みくだかれたのです。その瞬間、重太郎がぬつと中から立上りますと、目を鏡のやうに光らせた魔物が不思議な叫聲をたてゝ後へとびのきました。娘でない若くれ男が飛出したので魔物は怒りに燃えて、また一と聲高くうなつたかと見る間に、重太郎を目がけて飛びつきました。その刹那、重太郎の刀が鏡のやうな魔物の目へづぶりと突刺さ

つたのです。

『ギャッ――』

魔物が苦しげに叫んだその聲は、人間とも猿ともつかない聲でした。重太郎がもう一度身構へた時には、魔物の力ないうめき聲が少し離れた森の方でしました。

魔物は森の奥へどん〳〵走つて行く樣子でした。

## 六

翌朝になりました。名主の庄右衛門は大勢の村人と一しよに山道を上つて「人見明神」の社へ來ました。昨夜捧げた犧牲が神樣の御身嫌にかなつて、きれいに喰べて貰へたかどうか、それを見屆けに行くのが習慣になつてゐたのです。

村の人達は、見なれないお武士が社の前に立つてゐたのを見て驚きました。しかも、そのお武士が眞赤な血を肩から浴びてゐるのを見た時、いよ〳〵驚きました。

『お武士樣、よく御無事でおいで下さいました。』名主の庄右衛門は、涙を流さないばかりに喜んでいひました。そこで、重太郎は昨夜からの出來事を細かに村の人達に話しました。

『村の皆さん、あなた方が神樣だと思つてゐたのは眞白な、



大きな怪物です。眞暗だつたので、姿がよくわからないので、鏡のやうな目をめがけて、一と太刀つき刺してやりました。それ、そのあたりにボタリ〳〵血が流れてゐます。それを便りに行つて御覽なさい。きつと怪物のゐる穴へ行着くに違ひありません。』

村の人達は重太郎の話を聞いて、今更のやうに驚いて、偉いお武士もあつたものだと、その勇氣にあきれました。そして、重太郎の樣子をしげ〳〵と見ました。

やがて、重太郎を先頭にして村人たちが地面にたれてゐる血を便りに行つて見ると、成程、熊笹の繁つた崖下に大きな洞穴がありました。

『ウーウ。ウーウ。……』と、不思議な呻聲がその中でしてゐます。

『あゝこの中だ。この中だ。』

と、皆なは一せいに叫びましたが、おびえたやうになつて重太郎のまはりにすがりつくやうに集りました。

しかし、その呻聲は次第に細つて行きました。

『皆さん、もう少しこゝで靜かに待つておいでなさい。皆さんが有難がつて毎年大事な〳〵娘さん達を喰させてやつた神樣の命はもう長いことはありません。これから行つて一と思ひに殺すのは譯ない事だが、その必要もないでせう。もう少しお待ちなさい。さうしたら神樣の正體を見せてあげます。』

と、重太郎がいつた時、村人たちはあきれたやうにお互ひの顏を見合せました。中には自分の娘を喰つた怪物の正體を一刻も早く見屆けたいと思つて口惜しさうに穴の中を見つめてゐる者もありました。

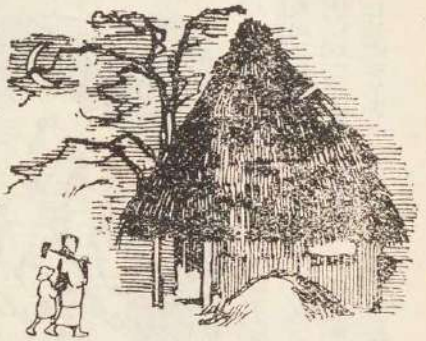
それから暫くたつと呻聲が全く絶えたので、重太郎は洞穴へ入つて行きましたが、間もなく大きな眞白な怪物を肩に擔いで出て來ました。よく見ると、それは大きな獅獅でした。毛は丸で銀のやうに光つてゐて身の丈が八尺もありました。

## 七

獅獅を退治て貰つた村人の喜びはどんなだつたでせう。とりわけ、名主の庄右衛門は娘を助けて貰つた恩人なので重太郎にどうかこの村で永く暮してくれるようにと頼みました。

で、重太郎も十年ほどそこに暮してゐましたが、まだ修行をしなければならない身の上ですから、再び武者修行の旅に出ました。

重太郎が村を立つて行つた日は、名主の庄右衛門はじめ太勢の村人が村はづれまで送つて行つて、重太郎の姿が見えなくなるまで涙を流して見送つてゐたといふことです。（をはり）



# 栗の木から聞いた話（推奨）

土橋力

私のお家は山の中です。秋も末の頃、丁度私が裏山へ薪拾ひに行つた歸りに、太い栗の木の根元に休んで汗を拭いてゐたら、栗の木がカサリ〳〵と葉を落しながら話してくれたのがこの話です。

## 一

幾つも山の重つた間を清い谷川が流れてゐました。山には雜木が一ぱい繁つてゐて、兩岸から張つた枝で谷川がかくれる程でした。その林の中に幾本もの栗の木がありました。

「あゝつまらないな。今日もまたあの雀や谷川は歌つてる。何が面白いのか少しも分りやしない。」

川端の太い栗の木の枝の先に生れた一人の栗の子供が今日もまた不平を云つてゐます。

この栗の子供は不平ばかり云つてゐて、何にも滿足しない我が儘者でした。兄さんや隣の樫の實が、

「あれ、あの小鳥は何て美しいだらう。」と云つても見向きもしません。雀が來て歌つてくれても、

「うるさい、用はないからあつちへ行け。己は栗なんかに生れるんぢやなかつた。」

と、どなりました。たゞやたらに栗の實をいやがつて、何か外の者になつて見たがつてゐました。ですから兄さん達が別に惡い事も云はないのにいつもつん〳〵してゐて、時には喧嘩さへする事もありました。

秋も更けて、幾日も降り續いた雨も止みました。栗達はもう皆なお家からとび出したくてたまらないやうになりました。

子供達は皆な手に〳〵ざるをかゝへて栗を拾ひに來てゐました。

「おーい、うまく叩かないと谷へ落ちてしまふぞ。」といつて、子供達は長い竿でバサン〳〵と栗のお家を叩いてくれました。その音が氣持ちよく澄み切つた山の空氣を破つて、高く響いて行く度にみのり切つた栗は、きつとバラバラと五つ六つ落ちて行きました。

例の不平ばかりいつてゐる栗の子供は未だ人間を見た事がありませんでしたから、さつきから珍らしく思つて人間の子供達を見てゐましたが、しまひにはたうとう兄さん達の止めるのも聞かずに、一人でバチンとはじけてしまひました。



「早く人間の所へ行つて見よう、さうしたらもつと面白く、もつと珍らしいに違ひない。さうして私はもつと外の者になりたい。實際栗の實はもう飽き飽きした。」と思つてはねたのでした。

ところが、せい一ぱいはねたつもりでしたが、谷の中へまつさかさまに落ち込んでしまひました。アッと思ふ間もなく、速い流れはドン〳〵栗をおし流して行つてしまひました。瀧になつて勢よく淵に落ち込んで、泡と一しよにグルリ〳〵とめぐつたり、岩の上を矢の樣に流れ下つたりしました。

「どうせつまらないんだ。どうでも勝手にしろ。」と栗は眼をつぶつてしまひました。さうしてどん〳〵流れて行きました。

突然樣子が變になりました。

「おやッ」と思つて、栗の實は眼を開きました。

## 二

そこから五六里川下に可哀さうな一家の者が住んでゐました。お父さんはもう三年ばかり前に死んで、お母さんと腰の曲つたお爺さんと、未だ幼い二人の子供とでわびしい暮をしてゐました。おまけに弟の子は、お父さんが亡くなるとすぐ長い病氣にかゝつて弱り切つてゐました。母さんは暗い中から兄さんの子と二人で畑を耕してはせつせと働きました。けれども弟の子に滿足に藥を買つてやる事も出來ず、その日その日の糊さへもたてかねてゐました。家は傾き、庭には草が一ぱい生えてゐました。弟の子はしめつぽい、日もろくにあたらない所で、一人で苦しんでゐました。おぢいさんは頭が眞白になつても遊んではゐられません。裏の日當りのよい畝隴まで出かけて行つては、そこで皆の草履やわらじを作りました。靜かな秋の日、お爺さんの打つ槌の音が力なく響いて行きます。

お爺さんはだまり切つてせつせとわらぢを作りました。小さい藁のすれる音がカサ〳〵とするばかりです。鳥が鳴いて通つてもお爺さんは一寸上を向いて見るだけで、又すぐ作り始めます。突然弟の子の苦しさうな叫び聲がしてくると、お爺さんは急いで這入つて行つては弟の子を慰めました。

裏の畑のくろには太い榛の木があつて、その向ふは笹藪でした。夕方、裏の低い障子に榛の木や笹の蔭が搖ぐ頃烏が來て榛の木に止つてカァ〳〵と泣くと、弟の子はもう淋しくてたまらなくなります。お爺さんも寒くはなるしまた淋しいので、仕事を片づけて家へはひつて來て、弟の子を慰める爲に色

色の話をしてくれます。何氣なく話すのですが、つい二人とも悲しくなつて來ては涙を流しました。

お爺さんは圍爐裡に火を燃やしてお湯をわかしました。しかし、貧乏でラムプをつける事も出來ない程でした。日も暮れ果てゝ木枯がビユウ〳〵吹き始めました。

『もう母さん達もすぐ歸るだらう。又何か話でもしようかな。え、何がいゝ。』

とお爺さんが慰めかねてゐる頃、母さん達は歸つて來ます。

『今歸つたよ、今日はどうだつたい。』

『邦ちやん、(弟の子の名) 今日ねこ下の川へ水呑みに行つたらこんないゝものを拾つた。普通の栗なんだけれど、折角川上から流れて來たのをやつととめたんだから大事に持つて來た。』と、兄さんは拾つた栗を見せました。

『兄さん植ゑて、その栗を植ゑて。』

弟はかなり強かましたが、かうだん

と又苦しさうに眼を閉ぢてしまひました。それでも兄は嬉しくて、裏の榛の木の横へその栗を大切に植ゑときました。

夜は母さんとお爺さんとが話をしてくれては睡らせました。それでも夜中に急に苦しむやうな事もありました。そんな時は、きつと兄さんもすぐ起きて來てはいろ〳〵世話をしました。實際この兄弟の仲のよい事！兄は自分はどうなつても弟を助けたい、弟を立派な者にしたいと考へてゐました。

冬の寒い朝もみんなは暗い中から働きに出ました。弟はお爺さんと二人で寒いお家に、淋しく一日を過しました。夕日が笹藪にかくれる頃は、やはり悲しくてなりませんでした。

春が來て暖かい日がポカ〳〵と當る樣になりました。けれども悲しい事には弟はます〳〵悪くなつて行きました。もうすつかり寒へ切つて、いよ〳〵明日も知れないと云ふ程になりました。母さん達は仕事もろく〳〵手につかず看病しました。兄さん達は、あれ程迄につくしたのにその甲斐もないので、たゞ涙にくれるばかりでした。弟はたうとう眼をつぶりました。そしてものも云はなくなりました。母さん達は氣が氣ではなく、

『邦雄、確りしとくれ、邦雄。』と呼んで見ました。すると突然、

『栗が生えて、栗が生えて』と弟が二言ばかり云ひました。母さん達は驚いて、

『あ生えたよ、邦雄、しつかりおし、栗を見るかい。』と急いで弟を抱き起して、裏の障子をあけました。

『ほら、ね、可愛らしい芽が出たらう。』

弟は見えるのか見えないのか、嬉しけにうなづきました。そして、そのまま、スヤ〳〵と眠りました。母さん達は、もうこれでいよ〳〵弟も死んで行くのかと思ふと、心臓でなりませんでした。けれども、その晩も過ぎて明日の日となつても弟は死にませんでした。

弟はその明日も栗を見て喜びました兄さんはあの栗が弟の爲にかうまで思はれてゐるのかと思ふと、可愛くてたまりませんでした。そして弟の顔をのぞき込みました。兄さんも母さんも始めて弟の嬉しさうな顔を見て、もう嬉しくて、これもあの栗のおかげである神樣が下さつたのだ、と涙ながらに喜びました。弟は日に〳〵快くなりました。

栗の木は眺められる度に嬉しく思ひました。始めは何と云ふつまらない所へ來たらう、と思つてゐました。けれども兄弟の仲のよいのを見たり、お爺さんの悲しい話を聞いたりしてゐる中に、ついさそはれて涙が流れでるやうになりました。弟が苦しい中にも兄を思ひ、兄が忙しい中に弟を助けて、自分の命にかへて迄と看病するのを見ては栗も感ぜずには居られませんでした。

兄さんが來て、

『栗よ、有難う。』と熱い涙を流した時は、栗も思はず『いえ兄さん、』と云つて嬉しさに枝を振はせました。栗はしまひには幸福だと思ひました。あの子供を助けたのだと思ひました。

弟の子はやつと歩けるやうになりました。そして毎日栗の木の所へ來ては、

栗よ有難うと云つては撫ぜてくれました。栗も嬉しくてサラ〳〵と枝をならして答へました。

栗はこの頃は毎晩圍爐裡端で、お爺さんの愉快な話や、家の者の笑ひ聲を聞く事が出來ました。そしてとも〳〵に喜びました。

栗に生れたのがしみじみ幸福に感ぜられました。

今では栗も弟の子もずつと大きくなりました。家も次第に運がよくなつて來て、栗の木のすぐそば迄も廣がつた立派なお家が立ちました。

栗は秋になると、子供達やおぢいさんに皆おいしい栗を上げます。そして相變らず仲よく暮してゐます。見上げるばかりになつた栗の木は大空高く枝をのばして、

『幸福、幸福。』

と叫んでゐます。(終り)

(作者住所、山梨縣西八代郡上九一色村)

# 和莊兵衛の夢

楠山正雄

## 三、自在國

和莊兵衛は鶴に乘つて不死國を出てから、どこといふあてなしに二三萬里飛んで行きますと、やがて大きな國が見えました。こは〳〵下りて見ますと、これはまた不死國などとは比べものにならない程富貴自在な國でした。町を歩いても、村をめぐつても、貧乏人らしい家は一軒も見當りません。どんなに小さな家でも、瑠璃の天井に瑪瑙の柱で、お庭には金銀の砂をしきつめて、蓮の一つとは



ない琥珀の飛石がてら〳〵光つてゐました。珊瑚の格子に瑪瑙の雨戸、それからまぶしいやうな銀板葺の屋根に下りた霜が朝日にとけると、水晶の筧を通つて、玉のやうな雫をぱたり〳〵、寶石を鏤めた往來の石疊の上に垂らしてゐました。中で貧乏人らしい家がこれですから、少しでも大家となると、繪にかいた月宮殿か、極樂淨土をそのまゝ小さくしたかと思ふやうなきら〳〵しさでした。

和莊兵衛はこの國でも大層お客好きな主人の世話になつて、二三十年逗留してゐる間に、またいろ〳〵のめづらしいことに出會ひました。

なるほど自在國といふだけあつて、何事も自由自在で、食べものでも着るものでもほしいと思へばすぐそこにでてくるのですから、國中に誰一人働くものがなく、百姓だの商人だのといふものもありません。毎日の食事はお米の原だの大麥小麥の原大豆小豆の原だのといつて、後からあとから穀物や野菜の湧出す原が方々にあつて、つい袋や桶をもつて行つて水をくむやうにくんでくればいゝのです。お米の原のすぐ左手には油の谷が始終流れてゐて、その岸には燈心草が茂つて、汀には蠟燭の穂がのびてゐました。それから右手にはお酒の川があつて、お盃の舟が浮いてゐました。お肴の岡を越すと、白砂糖の砂原があり、その近くに味淋の池だの、燒酎の泉だのがちらばつてゐました。それをすぎて行くと、お饅頭の森や餅の林が茂つてゐて、金平糖や落雁の花が咲き、大福やお饅頭の實が實りきつて餡をはみ出さしてゐました。

山に上つて見ると、絹布木といつて芭蕉の木に似た大木が何千本となくあつて、芭蕉の卷葉のやうな大きな葉を卷いてゐます。これがこの國の人たちの着物になるので、春夏秋冬いろ〳〵に木の葉の色が變ります。春は薄い霞の衣の中から、縮緬や羽二重のかはいらしい芽が出ますし、それが夏のあつい日盛りになると、紗や絽織、縮や晒の若葉にかはります。やがて秋風の吹く頃になると、もえるやうな錦

織の紅葉にかはつて、間もなく冬の時雨や木枯の寂しい季節になつても、枯木にもならないで、綸子だの天鵞絨だの、紬や綿の返り花が咲くので、その度毎にみんなは鋏と物差をもつて山に上がつて來て、めい〳〵の好みに應じ、季節に合つた卷葉を切つて歸つて、着物にでも帶にでも仕立てるのです。

和莊兵衛は自在國に來てから、面白くつてたまらないので、毎日友だちを五六人案内につれて國中をうかれ歩きました。ちやうど春のことで野山には霞がたなびいてゐて、絹糸のやうに柔かな青草を踏むとぶんといゝ香りが立ちました。お酒の川の岸に毛氈をしいて、お肴の岡からおいしさうなお肴をとつて來てお酒もりをしたり、のどが干いて甘いものがほしくなるとお饅頭の森や餅の林に入つて、羊羹やカステラをつまんで薄茶や濃茶の山の井戸からお茶の水を汲んでのみました。そしてくたびれると、家に歸つて、絹の疊の上に綾錦の薄團をしいて休みました。

こんな風に何不足のない自由自在國でしたが、或時天竺から坊さんが二三人この國に渡つて來て、佛の教や聖人の道を説法して聞かせて、人間は苦しいことがあつてこそ樂しみの味も分かり、貧乏してこそ富貴の望みもおこるので、この國の人のやうに樂しいことばかりで苦しいことを知らず、いつもみんなが同じやうに富貴では、樂しみもほんたうの樂しみではなく、富貴の有りがたみも分からない道理だといひました。それからはみんな今更夢のさめたやうな顏をして、あくる日からは、神棚に貧乏神をまつり、神樣どうかこの樂しい身の上を可哀さうに思召して、たくさん苦しみをお授け下さいましと氣ちがひのやうになつて祈りました。けれども一向貧乏神の御利益はあらはれず、相變らずお米もお金も地から湧き、餅もお饅頭も森に茂り、着物は山に生えお酒は川に流れて、何もかも有り餘るので、今更この世の中に何一つ欲しいと思ふものもなくなつて、生きてゐる樂しみがなくなりました。



和莊兵衛も初めの中こそ物めづらしゝつて、こんないゝ國はまたとあるまいと喜んでゐましたが、一通り樂しみに飽きるともう何を見てもつまらなくなりました。そこで或日、

『あゝ飽々した。こんないやしい國はもうこり〳〵だ。』

かういつて大きなあくびを一つすると、またついと鶴の脊中にとび乘つて、世話になつた人にもろくろく挨拶もせず、こんどは西の方に向つてとんで行きました。

## 四、自暴國

和莊兵衛は不死國にゐる間に、人間がむやみと死ぬことをこはがる馬鹿らしいことが分かりましたし自在國では人間の幸福には限りがあつて、樂しみばかりで苦しみのない世界がどんなに退屈なものだといふことを悟りました。それで自分ながら大分賢くなつたやうに思つて、この先方々見てあるいてもこの上大して利口にもなるまいと高慢な顏をしながら風の吹きつけるまゝあてもなしにとんで行きますとまた一二萬里西の方の矯飾國に着きました。矯飾といふのは僞つてうはべばかりを飾ることで、ほんたうにこの名の通りこの國の人たちは貧乏なくせにお金持らしく見せかけたり、何にも知らないくせに知つたかぶりをするそれは不正直ないやな人たちばかりでしたから、和莊兵衛はろく〳〵落ちつくひまもなく、また鶴に乘つてとび出しました。

その次に和莊兵衛の着いたのは好古國といつて、これも名の通り何でも古いことが好きで、自由なこの世の中に、わざ〳〵不自由を忍んでも、文明の開けないむかしの人のまねをして嬉しがつてゐる國でした。和莊兵衛は馬鹿々々しいのでこゝもいゝかげんにして、また外の國へ飛んで行きました。

好古國であんまり古くさいことばかりを見せられて、何だか自分の體までかび臭い匂ひが移つたやうな氣がするものですから、こんどは思ひ切つてさば

さばと新らしい國はないかしらと思ひ〳〵和莊兵衛は自暴國といふ國に來ました。

自暴國といふのは自分勝手な國といふことで、それは自分勝手な、何でもさし當り自分に都合のいゝやうな理窟ばかりをてん〴〵が言ひ合つて、禮儀もなければ作法もない、人情も道理も分からない人たちばかりそこには住んでゐました。

この國の人はめい〳〵自分の權利といふことをやかましく言合つて、人間は誰も平等だから、貴族だとか平民だとか、お金持だとか貧乏人だとかいふ差別が人間同士の間にあるわけのものではないと言ひます。仕事はどんな仕事でもめいめいが同じやうに分けてして、誰一人、外の者より餘計働いて汗水を流すやうな馬鹿なまねはしないのです。歩く時はめい〳〵の足で歩くのですから勝手ですが、駕にのつたり、車にのつたりしたいと思ふとせひ駕にのるものとのせるものと、車にのるものとのせるものができる道理で、それでは不公平だといふので、この國の人は男でも女でも胸に一つづつ孔があいてゐて、三人づつ連立つて歩けば、三人が代り合つて、一人の胸の孔に棒をとほしては外の二人がかつぎます。

けれどももと〳〵自分勝手な人たちの寄り合ひですから、働いて骨を折ることだけには平等だの、公平だのとやかましくいひますけれど、遊んで樂をする方は強い者勝で、他人のことなんぞ考へるものはありません。ですから若い、達者なものほど我がままをして、年寄や子供をいたはつたりするものはありません。男も女も仕事は公平に分けなければならないといふので、御亭主もお上さんと一しよになつて臺所を働いたり、洗濯物をしたり、おまけにお產の時にまでお上さん一人が子供を生む上に、おなかを痛めて苦しむといふ法がないといふので、お上さんは子供だけ生んで、おなかの痛む方は御亭主にあづけることにしました。ですからお產といふと、一人ですむことがお上さんと御亭主と二人前手數がかかつて、そのくせ赤ちやんが產れても世話をするものがない始末でした。

和莊兵衛はつく〳〵自分勝手な人間が鼻の先で考へた理窟の馬鹿らしいことを悟つて、また鶴に乘つて飛んで行きました。

## 五、大人國

和莊兵衛は行けば行くほどつまらなくなるので、三千世界の旅にもそろ〳〵飽きて來ました。十萬億土へ行つて世界の西の果にある極樂淨土をたづねようかと思ひましたが、是も佛樣のお經にくはしく書いてあるので今更めづらしくも思はれません。海の底へ下つて行つて龍宮のお城を見て來ようかとも思ひましたが、これも浦島太郎の昔話で誰も知つてゐる所です。お經にも昔話にもない不思議な國が三千世界を通り越したどこか向うにあるに違ひないと思ひました。そこでまづ南の方に向つて、一日に五六百里から千里づつもとんで、どこまでも〳〵、途中にいくつ國があつてもかまはずに、あくまでこの世界

をつきぬけるつもりで進んで行きました。さうして三月ほど立つうちに、太陽と月の光がだん〳〵遠くなつて、一日々々と夕ぐれが迫るやうに薄ぐらくなつて來ました。とう〳〵五月めには夜も晝もない明けてもくれても眞くら闇の世界にとび込んでしまひました。こゝまでくるとさすがに不老不死國の靈鳥も勢が弱つたと見えて鶴は悲しさうな聲でくう〳〵啼きはじめました。かうなると和莊兵衛も心配になつて、間ちがつて地獄のどん底に落ちたのではないかと思ひましたが、いや、これはいよ〳〵三千世界の外の日や月の光のとゞかない所まで來たにちがひない。どうにかしてこの暗闇をつきぬければ、また明るくなつて別の世界が開けるだらう、かう思ひ返して弱つてゐる鶴に元氣をつけ〳〵、夜も晝もないのでむろんよくは分かりませんが、何でもそれから三四月夢中でとびつゞけるうち、だん〳〵そこらがほんのり明るくなつて來ました。和莊兵衛も鶴も生れ變りたやうに元氣がついて、一日に二三千里一息にとぶと、行けば行くほど明るくなつて、三日めには見る〳〵目の下に大きな國があらはれました。

和莊兵はほつと半年ぶりの大きな溜息をついてそろ〳〵下りて行きますと、大きな竹藪があつて、その中に廣い道が通じてゐました。和莊兵衛は竹藪の中に下りて一休してそこらを見まはしますと竹藪

だと思つたのは麥畑で、この國の麥は日本の大竹位の太さがあるのです。不思議に思つて麥畑の中の道を少し歩いて行くと、路ばたにあるすみれやたんぽぽまでが自分の脊とすれ〳〵の高さです。松や檜などの木になると何十丈あるのか、何百丈あるのか、いくら見上げても梢が見えない位でした。

和莊兵衛はびつくりして、たゞもうきよろ〳〵目ばかり光らせながら畑をつきぬけて行きますと、たくさん家の並んでゐる町らしい所へ出ました。家といつてもどれもこれも奈良の大佛殿よりも大きな家ばかりで、その間にお城のやうな土藏がいくつもいくつも並んでゐました。何でもこの國の王樣のお城のお庭には、富士山より大きな築山と、琵琶湖よりも大きい池があるさうですから、ちよいと往來に流れてゐるちよろ〳〵水が淀川位ありさうに見えるのも不思議ではありませんでした。

和莊兵衛は見るものも見るものもあんまり圖ぬけて大きいので、自分の體がちゞんで小さくなつたのかしらんと思つて見さはしましたが、やはり五尺四五寸の男にちがひありませんでした。

和莊兵衛が魂をぬかれた人のやうにぼんやり往來に立つてゐますと、そこらの家の中からのそ〳〵人が出て來ました。それがどれも五六丈から男には七丈位の脊の高さのものがありました。よち〳〵歩きの子供でも二丈位はありました。その中子供たちの一人が和莊兵衛を見つけて、

『やあ、小ちやな人形が歩いてゐるよ。』といひながら、指の先で摘み上げました。

するとおかあさんらしい大女が、

『どれお見せ、坊や。まあ、これでも人形ぢやない生きてゐる人間だよ。』といひました。

するとみんな寄つて來て、てん〳〵に和莊兵衛を摘んで見て、

『おや〳〵まあ。』といひました。

和莊兵衛は頭をもつて吊下られたり、足をつかんで逆さに立てられたり、勝手にいぢくりまはされる

ので、目がまはつて、苦しくつて、死にさうになりました。そこで眞赤になつて大男の掌の上で兩足をふんばり、一生けんめい大きな聲を振り絞りながら、

『やい〳〵、おれは大日本國の四海屋和莊兵衛だぞ。小さいと思つて馬鹿にして、あんまり失禮なまねをすると、義經流の早業でひどい目におはしてやるから。』と叫び立てました。

和莊兵衛のいふ言葉は分かりませんが、その樣子を見ると、みんなをかしがつて、

『やあ、口をきくよ。おもしろい、おもしろい。』といつて、餘計和莊兵衛をおもちやにします。

あんまりおもしろづくに和莊兵衛がいぢめられるので、中で一人りつぱな髯を生やして、學者らしい風をした宏智先生といふ大男が可哀さうに思つて、和莊兵衛をもらつて、子供が蟲でもつかまへたやうに掌の中に入れて、そつと家へ持つてかへりました。

先生は家へかへると、四疊半の小座敷といつても御堂の本堂位ひろい大座敷に、小机といつても三間に六間位の大机に大毛氈のきれはしをしいて、その上に和莊兵衛を坐らせました。そして三度々々日本の眞桑瓜位の大きさのある飯粒を、天秤棒位あるお箸で一粒づつ養つて食べさせました。和莊兵衛も仕方がないので雀の子になつたつもりで、おとなしく飯粒をかじつて餓をしのぎました。

すると宏智先生の所に、不思議な小人が來たといふので、近所の人たちが毎日毎晩見物にやつて來ました。そして山雀の見世物でも見るやうに、いろいろの藝當をさせて見て、和莊兵衛が一粒の飯粒をかじる所を見てはおもしろがり、

『これでは摺餌も麻の實もいりませんね。御飯粒で育てば、鶉を飼ふより世話はありません。』といふものもありました。

和莊兵衛は先生の所に厄介になつてゐる中に、だん〳〵大人國の樣子も分かり、この國の言葉も分かるやうになりました。

なるほど人間の體が十倍も大きいだけあつて、國のひろさも唐や天竺に比べると十倍もありました。いつも朗かに晴れた氣候のいゝ國で、さう骨を折らないでも穀物がよく實つて、何によらず富貴な住み心地のよい國でした。けれども不思議なことにはこの國には王樣もなければ大臣もなく、政治だの法律だのといふものはまるで必要がありませんし、神佛を信心したり、聖人の敎を守るといふやうなことも

ありません。學者だの、軍人だの、商人だのといふものも一人もありません。男は畑を作り、女は機を織つて、暇があると、寄り合つてにこ〳〵しながら、たあいもない話をし合つてゐるだけでした。

和莊兵衛はこの樣子をながめて、獨活の大木といふことがあるが、なるほどこの國の人間は體ばかり十層倍大きいくせに、智慧はおれの十分一もないやうだ。これなれば體こそ小さいが、この馬鹿な人間共を智慧で從へて、おれがこの國の王樣になつてやらうと思ひ立ちました。そこでこれからは大勢先生の所へ人の集つてくるたんびに、机の上に突立ち上がつて、ありつたけの大聲をはり上げながら、日本の神樣の道から、唐の孔子の敎や天竺の佛樣のお經をもとに自分が三千世界をめぐり歩いて覺えて來たいろいろのめづらしい話を織交ぜて、人間の道を說いて聞かせました。それは我ながら聞きほれるほどねつしんに、くり返し、くり返し說いて聞かせましたから、これではさすがの大人國の人たちも感心して、和莊兵衛を神樣のやうに慕つてくる筈だと思はれました。ところがいくら赤くなつて、聲の枯れるほど說き立てゝも、みんなは相變らずにこ〳〵しながら、『どうしてこれは鸚鵡を飼ふよりよつぽどおもしろいものだ。餌をやりすぎないやうに、大事にしてお飼ひなさい。』といひ〳〵歸つて行きました。

和莊兵衛はせつかくのお說法がまるつきり通じないのでがつかりして先生に向ひ、さも口惜しさうに、『この國の人間はよつぽど馬鹿ですね。』といひました。

すると先生は人がよさゝうににこ〳〵笑つて、『神樣だの佛樣だのといつてももと〳〵小人の國に生れた神樣佛樣ぢやないか。大人國へ來ればやはりお前と同樣小人の仲間だよ。そんなたかゞ小人の智慧では大人國の人間はおどろかないよ。お前もせつかく方々めぐり歩いていろ〳〵のことを覺えて來たところだから、今の中に國へ歸つて小人の仲間へおみやげに自慢話を待つて行くがいゝ。』

かういつて、先生はいきなり和莊兵衛を摘み上げて掌にのせました。そして緣先に出ると、東の方の空に向つて、和莊兵衛をふつと吹きとばしました。和莊兵衛ははつと思ふ間もなく、體が宙に浮いて、そのまゝふら〳〵と、高くとんで行きました。そして空の上で二三度くる〳〵と宙返りをしましたが、見る〳〵大人國の空をはなれて、やがてまつさかさまに、三千世界の境目の眞暗闇の中に落ち込んで行きました。和莊兵衛は地獄の底に投込まれたやうな氣がして、あつと叫びました。そのとたんにぱつちり目がさめました。

和莊兵衛はきよろ〳〵しながらそこらを見まはしますと、やはり故郷の長崎の隱居所の海を見はらした庭先で、涼みながらひるねをしてゐたのでした。長い〳〵夏の日ももう西の空に落ちかけて、冷たい風がそよ〳〵海の方から吹いて來ました。和莊兵衛は身ぶるひしながら、はツくしよいとくさめを一つしました。

（をはり）

世界名作童話物語（その三）

# 家なき子

## 二、故郷と別れて

三宅房子

私は一と晩中いやな夢ばかり見ました。目が覚めた時、真益にさはつて見たら、矢張り自分の家だつたのでホッとしました。

パルブレンは（母さんの御亭主の名です。つまり私の養父です。この人のことをこれからパルブレンといふ名で呼びます。）その朝私に何にもいひませんでしたから、私を孤兒院へやる考へはお止めにしたのだらうと思ひました。

けれども、お昼頃になつた時、パルブレンは私に帽子をかぶつて従いて來いといひました。私は何にもいはずに後からついて行きました。村へ行くのには一時間ばかりかゝりましたが、パルブレンはその間中一とことも私に口をきゝませんでした。たゞ時々振返つては私がついて來てゐるかどうか見ました。

私は、一體、どこへ連れて行かれるのでせう。それを思ふと、私は心配で心配でたまりませんでした。何か一大事が起りさうな氣がしました。私は一その事逃出さうかとも思ひました。で、私はわざとのろ〳〵歩きました。そして、いざとなれば瀦の中へでも飛込む決心でゐました。

パルブレンは私が後からついて來るので、はじめは安心してゐるやうでしたが、その内に私の心の中が分つたと見えて、いなをり従

けて來て私の頸首をつかまへました。私は引ずられながら村へ入つて行きました。まるで犬が綱で引張られて行くやうでしたから、すれ違ひの人達が妙な顔をして私を見ました。

村の居酒屋の前へ來かゝつた時、そこの入口に一人の男が立つてゐて、パルブレンに向つて『中へ入らないかれ。』といつたので、彼は私を引ずりながら中へ入つて行きました。

今思へばこれが酒場の御亭主でした。パルブレンは酒場の亭主と向ひ合つて食卓を囲みました。その間私はひとりで爐の傍に腰をかけてそこらを見廻してゐました。

その時、私のすぐ向の椅子に一人の老人が腰掛子に寢てゐました。そのお爺さんは白い鬚を生やした容の高い人で、羊の皮でこしらへた奇妙な着物を着てゐます。私はこれまでにこんなに靜かな容つた人を見たことがありませんでした。まるで村のお寺の壁に畫にかいてある名高いお坊さんのやうだと思ひました。

お爺さんのまはりには三匹の旭犬が横てゐます。白い毛の犬と、黑い毛の犬と、それから黑と白とのまだらの犬が一匹です。そして



白い旭犬はまるでお巡りさんのかぶるやうな古い兜帽をかぶつてゐました。

私は不思議に思つて、このお爺さんの樣子を見つめてゐました。すると、パルブレンが酒場の主人と何かひそ〳〵話をしてゐます。何だらうと思つて耳をすますと、それは私の事でした。パルブレンはかういつて私の事を話してゐます。私を村長さんの所へ連れて行つて、孤兒院から私の養育料を拂つて貰ふやうにしてもらふのだといつてゐるのです。この話聲は寢てゐるお爺さんの耳にも響いたと見えて、むく〳〵と起上つて來ました。

『この子供はあなたの厄介物なんですか。』と、お爺さんが話しかけました。

『あゝ、さうなんだよ。』と、パルブレンが答へると、お爺さんは丁度いゝ話を聞いたといふやうに相談をもちかけました。

お爺さんのいふのには『孤兒院から養育料を取らうつたつてそれは無駄な話だから、それよりか一そうの事、厄介拂をするつもりでその子を私にくれないか』と、いふのでした。

しかし、パルブレンは答へました。

『この子は村で一番の器量よしなんだから、無駄にはやれない。なアルミ、こゝへ來な。』パルブレンは私を呼びました。

私はふるへながら傍へ行きました。

『坊や、こはがる事はないよ。』と、お爺さんがやさしく言ひました。

『さア、よく見てくれ。』かういつたのはパルブレンでした。

『しかし、あまり丈夫ではないやうだれ。』とお爺さんがいひました。

『丈夫ではないつて、とんでもない話だ。この子は誰にだつて負けるものか。先づ第一にあの足を見てもらひたい。あの通りしつかりしてゐる。』といつて、パルブレンは私のズボンをまくり上げて見せました。

『疥せすぎてゐるな。』

『そんなら腕を見てくれ。』

『腕も同樣だれ。まアこれでも濟むが。苦しい事や、辛い事にはとても駄目だれ。』

『なに、駄目だつて、じやうだんぢやない、手で觸つてよく檢べてもらひたいもんだ。』

お爺さんは疥せた手で私の足に觸つて見てゐましたが、頭をふつたり、顎をしかめたりしました。

私はその時、牡牛が賣られて行つた時の事を思出しました。牡牛は私が今まれたやうに北牛の身體を手で觸つたり、つねつたりしてはわざと首をかしげました。此牛は強でもない牛だ、とても賣物にはならないなどといつてゐながら、たうとう買つて連れて行つてしまつたのです。きつとこの老人もこんな事をいつてゐながら、私を買つて連れて行くのでせう。

『母さん、母さん、私は賣られさうです。』私は口には出しませんが心の中で幾度か叫びました。併し、母さんは其處にはゐないのです。

お爺さんはいひました。『では先づこれだけの子供として、兎に角私が引受けることにしませう。勿論買ひ切るのではない。たゞ借りるだけだ。その借り賃として年に二十フラン（凡そ七圓五十錢）出す事にしよう。』

『たつた二十フランかい。』

『しかし、その方がお前さんの得になると思ふ。孤兒院で養育料を拂つてくれたところで漸く月に七フラン（凡そ二圓五十錢）位のもので、しかも、お前さんが自分で食べませなければならないのだかれ。』

バルブレンは最初はなか〳〵承知をしませんでしたが、いろ〳〵お爺さんにいはれたので、たうとう承知しました。そして、

『一體、お前さんはこの子を何に使ふつもりなんだい。』と、きゝました。

『私の相手になつて貰ふのさ。私は年をとつて來たし、夜なんぞは淋しくて困る。草臥れてゐる時なんぞ、子供が傍にゐてくれると、私にはいゝ慰めになるからね。』

『成る程、それならこの子はもつて來いだ。』

『しかし、それだけではない。この子はまた踊をおどつたり、跳廻つたり、遠い路を歩いたりしなければならない。つまりこの子はピタリスといふ親方の一座の役者になるのだ。』

『へーい、その一座といふのは何處にあるのだい。』

『そのピタリス親方といふのは實はこの私さ。私の一座をお目にかけようか。』

お爺さんはかういつた時、着てゐた羊の皮物のふところを開けて、奇妙な動物を引出しました。それはお猿でした。

『やア、氣味の惡い猿だな。』と、バルブレンが叫びました。猿は猿といふ動物をはじめて見てびつくりしました。

『これが一座の花形、即ちジョーリークールさんお客樣たちに御挨拶をなさい。』

お爺さんがかういふと、お猿は指を唇にあて、私達にキッスを送る眞似をしました。

次にお爺さんは白い慈犬の方へ手を出しました。そして、

『今度はカピ親方が御列席の皆々さまに一座の者を御引合せしますよ。』といひました。

と、その時まで、少しも動かなかつた白犬がむく〳〵と起上つて、後足で立ちながら前足を胸のところで組んで先づ御主人のお爺さんに向つて丁寧にお辭儀をしました。白犬は猿の眞似をしますと、自分の前に坐を向いて、片足を出して皆なにオイデ〳〵と合圖をしました。黑犬と灰色の牝犬はその時まで白犬のすることをぢつと見てゐましたが、すぐと立上つて、お互ひに手を引合つて交際社會の人達がするやうに前へ六歩進み、それから三歩後へ退いてお客樣達に丁寧にお辭儀をしました。

『白犬の名はカピといつて、一ばんの利巧者です。また黑犬はセルピノといつて侯爵のやうに優美です。それからあの極くおとなしやかな灰色のはドルシ夫人です。かういふ立派な藝人揃ひで、私は國中を旅して暮らして來てゐるのです。いゝこともあれば惡いこともある。しかし、何事もその時々の廻り合せでさア、……ねエ……カピや……』

一番利巧者のカピはそれに答へるやうに前足を十文字に組みました。

お爺さんはまたいひました。『こゝにゐる者はみんな利巧者ばかりだ。そこで、私の一座に一人、この花形役者たちにまじつて馬鹿の役をつとめる者があつてくれると、一層彼等の利巧な事がわかるのです。私はお前さんの子供をその馬鹿の役者として欲しいのだ。』

『ヘエ、この子が馬鹿の役をつとめるのかい。』バルブレンはあきれて首ひました。

『さうです。だが、馬鹿の役をつとめる者は利巧者でなければ役に立たないよ。』

お爺さんがかういつた時、私は面白いなア、と思ひました。犬の仲間に入つて旅をするのはきつと愉快な事でせう。しかし、母さんと別れるのはいやだと思ひました。でも、いつかは別れなければならない身の上かと思ふと情けなくつて涙が出ました。

お爺さんとバルブレンは、それからまだいろ〳〵話をしてゐましたが、たうとう話がきまつたと見えて、

『さア、歸らう。』とバルブレンが立上りました。私は黙つて彼の後について酒場を出ました。途中まで來ると、彼は觀基にもいきなり私の耳をつかみました。そして、

『やい。貴樣、今日のことを一とことでも母さんにしやべつて見ろ。ひどい目に合せるから。覺えてゐろ。』と、嗾鳴りました。

家には母さんが待つてゐました。

『まア、もう歸つたの、村長さんは何といひました。』と、母さんがきゝました。

『あつて來なかつたよ。』

『どうしてあつて來なかつたのです。』

『丁度村の酒場でれ。友達にあつたのだ。そこで話し込んでしまつて遲くなつたから、また明日行くことにした。』

私は、バルブレンがゐなくなつたら今日の事を殘らず母さんに話さうと思つてゐました。ところが、バルブレンは一と晩中家を離れないのでたうとう話すことが出來ませんでした。私はすぐ〳〵寢床に入りました。明日はきつと話さう、さう思つて眠りました。

けれども、その翌朝、目を覺した時には母さんの姿が見えないのです。私が夢中で家中を探して歩くと、バルブレンが何をしてゐるのだときゝました。

『母さんを探してゐるのです。』と私がいふと

『あゝ母さんなら村へ行つたよ。お婆過ぎでなければ歸らないよ。』と平氣な顏でいひました。

母さんは前の晩には、村へ行くといふ話は少しもしてゐなかつたのです。私は心配でたまらなくなりました。バルブレンの顏を見てゐると、陰謀に心配になりますからその惡い目を避るつもりで裏の野菜畑へ出ました。

しばらくすると、またバルブレンが癇癪聲で私を呼んでゐますから、こは〳〵家へ入つて行くと、まアどうでせう。昨日のお爺さんが犬をつれて爐の前に立つてゐるではありませんか。

私はすぐ自分がどうされるか分りました。お爺さんは私をつれに來たのです。それを邪魔するといけないと思つて、母さんは村へお使ひにやられたのです。今となつてはバルブレンに何をいつて見たところで無駄だと思ひましたから、私はお爺さんのところへ駆けて行つて、

『お爺さん、どうぞお願ひです。僕をつれて行かないで下さい。』

と、私はしく〳〵泣きながらいひました。

すると、お爺さんはやさしい聲で、

『坊や、心配することはない。私とゐればつらいことなんぞないよ。私は子供をぶつたりなどはしない。それに仲間には犬もゐる。……坊はどうして私と行くのがいやなのだ。』

『母さんと別れるのが……』私はかういつただけで聲がつまりました。するとパルプレンがまた荒々しい聲で、

『やい！　貧樂はどうせこゝには置けないのだ。この且那について行くか、それとも孤兒院へ行くか、どつちにでもしろ。』と叱鳴りました。

『どつちもいやです。母さんがいゝんです。母さんが……』私はおい〳〵泣きました。

『いつまで家賃をねかしてゐるか。やい、どうするか見ておいてやるから、ありつたけの聲で呼びまして、ぐず〳〵言はずに家へ帰つてゐます。』聲の上には母さんの家の聞つた牝鶏がかけ廻つてゐます。それから家の横には私がいつも馬だといつて上つた曲つた梨の樹が立つてゐます。小川のこちらには私が水車をかけるのだといつて大騒ぎをした堰割が見えてゐます。

ふと見ると、往來の上を白い帽子をかぶつた女の人が私の家の方へ行きます。確分道方ですから、まるで白い綿そのやうに見えましたが、たしかに、母さんである事を知りました。さうだ、たしかに母さんに違ひないのです。

『さア、出かけようか。』その時、お爺さんは立上りました。

『後生ですから、も少し待つて下さい。』

私は夢中で母さんの姿を見てゐて、動かうともしませんでした。

母さんは氣がせいてゐるやうに家へ入つて行きましたが、ぢきに飛んで出て來て、雨戸をひろげながら庭の中を何か探すやうに駆け廻つてゐます。私は思はず飛上つて土手の上に立ち上りました。

母さんは、私を探してゐるのです。私は、首を前にのばして、ありつたけの聲で呼びました。

『母アさーん、母アさーん。……』

けれども、その聲は途中で消えてしまつて母アさんの耳には聞える筈がありません。

『どうしたんだ。梨でも狂つたのか。』

お爺さんはびつくりしてきゝました。私は何とも答へませんでした。

私はたゞちつと母さんばかり見詰めてゐました。けれども、母さんの方では私のゐる事を知りませんから、私の方は見もしないで、聞中をぐる〳〵廻つたり往來へ出たりして、きよろ〳〵してゐます。

私は前よりも、もつと大きい聲で母さんを呼びました。けれども、はじめと同じやうに無駄でした。

その時、お爺さんにも母さんの姿が目に入つたので、

『可哀さうに……』と綱首のやうにいひました。

『お爺さん、どうか僕を隠して下さい。』

私は泣聲でいひました。けれども、お爺さんはそれには答へないで、私の綱首をまたしつかりと押へて、

『さア、大分に騒んだから、もう出かけよう。さア、カピ、セルピノ、進め！』

お爺さんは二匹の犬を呼んでトボ〳〵歩き出しました。

私は二歩三歩あるくたんびに振返つては見ましたが、たうとう坂の曲り角に來てしまひました。母さんの家はもう見えませんでした。見えるのはたゞ遠い彼方の山ばかりでした。あゝ私はこれから何處へ行くのでせうか。

（つゞく）





家かち追出してくれるから。』

お爺さんは、その時、見兼れて、

『この子は母親に別れるのを悲しがつてゐるのだ。それを打つものではない。本當にやさしいいゝ心ぢやないか。』と、いひました。

『君が、そんな優しい事をいふから餘計につけ込みやがる。』

『まア、さう怒らずと、早く話をきめよう。』

お爺さんはかういひながら五フラン（凡そ二圓位）の金貨を八枚テーブルの上にのせました。と、パルプレンはあわてゝそれを隠しへしまひ込みました。

『さア、坊や、一しよにお出で。それからカピや、お前も行くのだ！』と、お爺さんがいつた時、私はあれみを乞ふやうにお爺さんに両手を差出しました。それから次にはパルプレンの方にも出しました。けれども、二人とも向をむいてしまひました。

お爺さんはたうとう私の綱首をつかまへました。私はもう行かなければならないのです。あゝいよ〳〵此家とも お別れなのでせうか。

私はお爺さんに引張られながら家の後方をまたいかに、自分の家賃なぞそこへ置いて行くやうな氣がしました。私は涙を一ぱいためてキョロ〳〵辺りを見廻しましたが、手近には誰も私に加勢してくれる人はゐませんでした。往來にも誰もゐません。牧場にもゐませんでした。

『母さーん、母さーん。……』私は夢中で叫びました。けれども、だあれも私の聲に答へる者はありませんでした。私はお爺さんについて行くより外ありませんでした。

『さア、急がう。』お爺さんはかういつて私の綱首を押へました。

私は坂を上つて行きました。振返つて見ると、母さんの家が遠くの方に見えました。家はだん〳〵小さく見えて行きます。あゝ今日まで仕合せに暮してゐたあの母さんの家もこれが見納めなのかしら。

『少し待たせて下さい。』と、私はお爺さんにいひました。

『うん、さうだねエ。』お爺さんはさういつて手を離してくれました。私は草がぱう〳〵と茂つた處へ腰をかけてしみ〴〵と母さんの家を眺めました。

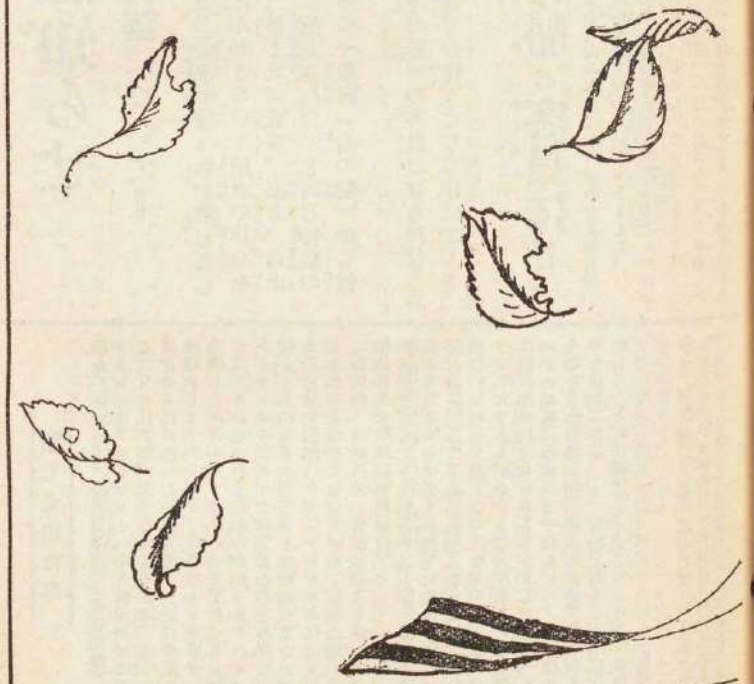
母さんの私の姿しかとは見えないが、まつ

# 冬の風鈴

百田 宗治

ちろりん、ちろりん
ちろ、ちろりん
雨戸のそとで
たゞひとり
風に吹かれて
鳴つてゐる
あの風鈴は
さびしさう……
ちろりん、ちろりん

ちろ、ちろりん
あの山越えて
野を越えて
つめたい冬が
來たものを……
ちろりん、ちろりん
ちろ、ちろりん
雨戸のそとで
ひとり言
風に吹かれて
泣いてゐる
あの風鈴は
かはいさう……



# ◈皆さんへお知らせ

## ＝讀者文藝について＝

『金の船』一本號は、讀者文藝欄を休んで、大家の讀み物を増しました。その代り來月號（三月號）には、ほんたうのいゝ讀者の作品を撰り拔いて載せます。そして一等から三等まで、（童謠、綴方、自由畫、幼年詩）に、野口先生が、澄宮殿下に献上されたのと同じ特製の童謠集「十五夜お月さん」を記念のために一冊宛『金の船』から贈呈いたすことゝ致します。

それから又皆さんへ、沖野先生が『金の船』お伽繪葉書をお作りになられたことゝ、岡本先生が『金の船』の客員になられたことをお知らせいたしませう。

# ◈沖野先生が「金の船」の客員に!!

沖野先生と「金の船」とは創刊號以來のおなじみです。毎號先生の面白い童話は「金の船」の誇でありました。殊に「山六爺さん」では金の船のきぢさんとして皆さんからヤンヤと迎へられました。

それで今度から、沖野先生にもっと〳〵皆さんとおなじみを深くしていたゞく積りで、金の船の客員となつていたゞきました。

先生は本誌の客員として迎へることの出來たのは實に「金の船」の名譽であります。これからは一層、本誌の童話のために御盡し下さる筈は勿論の事、いろ〳〵のお働きなどに始終御親の通信欄をにぎはすことでありませう。

# ◈岡本先生の「金の船」繪葉書

皆さんは、前號の本誌で發表いたしましたから御存じでせうが、岡本陸一先生が長い間苦心をされてお描きになつた「金の船」繪葉書の第一輯が出來ます。世界一の童話劇作家ヒーリス・メーテルリンクの一番の傑作で、しかも世界中どこの國の百樂にも飜譯されてどこの國の子供さん達からも歡迎されてゐる「青い鳥」の中から、皆さん方に親みの多い、いろ〳〵な場面を四枚の繪葉書に、ほんたうに美しく原色版六度刷で描かれてあります。

もう既に「金の船」誌友の一愛讀者から二百部、少女界愛讀者の「界ちゃん會」から一百部の申込みがありました。

# ◈「金の船」の誌友を募集します

この際「金の船」は、誌友の大募集をいたします。一度誌友になつてお置きになると、特別の御便宜があります。とりわけ地方にお住ひの方には、「金の船」に關係のある書籍の出版のことにお知らせ致します。誌友規則は編輯所宛にハガキでお申越しになれば、どこにも直ぐお送り致します。

皆さん方はお友達をおさそひになつて「金の船」の誌友におなり下さい。地方においでのお方に、とくにお勸め申します。





## 新しく出た本

◈**テレマツク冒險譚**（秋田雨雀氏譯）フランスのフエネロンといふ大僧正が將來國王になられる若い王子を教育する時、王子に聞かせる爲に作つた物語です。お話は希臘の神話からとつたもので、有名なトロヤ戰爭に出陣した國王ユーリスがいつまでたつても歸つて來られないので王子のテレマツクはマントールといふ賢者をつれて王の行方を探れて行くことになるのです。その旅の中でさまざまな危險や困難にあつてテレマツクは段々強しく正しく大きくなつていくといふお話です（四六判　四五四頁　定價二圓五十錢　東京牛込津久土町精華書院發行）

◈**港へ着いた黑ん坊**（小川未明著）可哀さうな盲目の少年とそれないたはる優しい姉弟が笛を吹けば姉が踊る、かうして二人は淋しいながらも愛し合つて生きてゐましたが一寸したゆきちがひから二人は永久に北と南に別れなければならなくなりました。すべてかういふ風にあはれな子供をいつくしみ愛する心から生れたのがこの人の童話です。何よりも貴劍であること、詩的であること、氣品のあること、特徴です。（小フカルス判　三四一頁　定價一圓八十錢　東京牛込津久土町精華書院發行）

◈**美しき國へ**（藤谷慶村氏著）オフエロといふ少年は身の丈が一尺五尺もあつて大きな獨子な一息でなぐり殺すくらゐ力がありました。それがある王樣の家來になつたりまた惡魔の弟子になつたりしてゐましたが、遂にキリストに救はれて聖キリストフオロ聖人と呼ばれるやうになりましたが、その後またある國王から外國征伐の大將になつてくれといはれましたがきゝ入れなかつたので殺されて美しき國へ行つたといふ物語です。（四六判　二〇七頁　定價一圓五十錢　東京小石川戸崎町九〇創文社發行）

◈**鐵道旅行案内**（鐵道省編）鐵道によつて旅行する人のために、鐵道沿線の名所、舊蹟旅館、溫泉など詳大もらさず詳しく丁寧に記してあります。それに地圖と挿畫が澤山入れてありますから、地理や歴史の參考にもなつて大層便利です。これさへあれば北海道から九州のはてまで案内人なしに有益に旅行することができます。この本はやがて、東京日本橋本石町博文館から發賣されて全國の書店に參ることになります。

◈**國宝寶の巣**（白鳥省吾氏著）誰にでもわかれやすい平易で快活な演説を集めたものであります。氏の童話は一種獨特なもので、子供に感じられ易い點で優れてゐます。氏の童話の世界には子供が愉快に入つていけます。おとぎのうた、たのしいうた、四季のうた、いろ〳〵のうたなどにわかれて凡て四十四篇難かしくて解らないなどいふものは一つもありません（ポケツト形　一三六頁　定價一圓東京牛込津久土町精華書院發行）

## 讀者だより

△武藏野には毎日々々筑波颪が吹きまくります。野の中の私の家はそれでもお日樣が上れば、ポカ〳〵と陽子へ日があたりますし。庭の廣場では鷄が時々思出したやうに鳴きます。私は今用のない身の上でございます。土地の女學校を卒業してから何もせずに家に居ります。かうした時思出すのは幼い頃の事でございます。それで私は毎日その頃のことを童話にして書いて居ります。記者樣！　どうぞ出來ましたら御覽下さいませ。（武藏野の少女）

△野口先生の童謠劇「二匹の犬と少女」を讀みました。新しい試みですね。どうか舞臺に上演されるといゝと思ひます。（青木洗）

△十月十五日にこちらへ引きこしてきました幼年學校の近くで機砲の音がよく聞えます。ほんたうによい所ですが學校が遠くなったのでこまります。（東京　武子）

△まず〳〵よくなる「金の船」私は金の船の愛讀者です。十二號の「汽車の窓から」といふ歌はほんたうに氣に入りました。私もせいぜいたくさん投書いたします。（東京　光子）

△「金の船」新年號の双六、感心しました。忠犬は僕大好きです。フランダースの犬といふお話を知つてゐます。あれを聞いた時には涙が出ました。（大阪　山口六郎）

△楠山正雄先生の「梵天國」といふ話は上品なそしてどことなく氣高い美しい變つた作だと思ひます。そしてまたあの岡本先生の「笛を吹けば」眞に美しくかけてゐます。あの鳩羽色の雲、桃色の衣、背僕らの心をセンチメンタルな僕の心を何一層思はせます。僕は眞に楠山先生の作は好きです。そしてこの間先生の「鐵馬の皮」といふのを買ひました。昔面白うございます。（兵庫　淀川長治）

△きら〳〵ひかる金の船
お本をつんだ金の船
日本國中まはりませう。（横濱　小笠原律子）

## 御挨拶まで

私は本誌の第一號から、一昨年の十二月まで、ずつと打通しに、毎號本誌の爲に童話を書きました。所がどうしたものか、一昨年の暮から、私の筆はぴたりと動かなくなりました。私は其頃、鎌倉の稻村ヶ崎に居て、毎日何か書きたい書きたいと思ひながら、海を眺めて、何にもせずに淋しく暮して居ました。所が昨年の暮、「本誌の主筆巽孫先生が、數々鎌倉まで、下谷の空也モナカを、お土產に持つて、本誌の主筆巽孫先生と對坐合つてお話をして居るうちに、何だかも一度童話を書くやうになれさうな心持が致しましたので、更に筆を執るお約束を致しました。

それから勇氣を出して、昨年の四月號から九ヶ月の間、毎月二つ或は三つずの童話を書き續けました。空也モナカは、そんなに私を元氣にして與れました。

昨年の暮に、また齋藤先生が、遽々私の宅へお出で下さいました。今度は空也モナカは持つて來て下さらなかつたが、私の昨年中書いた童話が大變面白かつたから、御褒美として、私を金の船の「客員」に推薦してやらうと仰しやいました。私はそれを此上もない名譽だと思ひます。

だから私は更に本年から「金の船」の爲に全力を挙げて執筆するばかりでなく、お伽講演の依頼にも應じる事になりました。ですから、私が講演に參りました時本誌多數の讀者諸君と親しくお目にかゝられるだらうといふ事を今から大きな樂しみに致してゐます。先は御挨拶まで。

沖野岩三郎

△いつか金の船の童話劇を拜見しました時、本居先生のお孃さんのみどり子さんの「十五夜お月さん」や「四丁目の犬」を聞いて大へんかんしんいたしたことがありました。こんどみどり子さんがお妹さんとお父さんとで澄宮殿下の御前で演奏なされたさうでお目出度いことです。野口先生の童謠も歌はれましたんですね。ほんとにお目出たうございます。私もこれからまず〳〵童謠に熱心になる決心です。（鎌倉　島村芳江）

△僕もとう〳〵「金の船」の誌友になることにしました。皆んながあんまり金の船、金の船といふものでかられ、先生どうか投書もしますから出して下さい。きっと出して下さい。（大分　佐伯純一）

△先生「金の船」の童謠劇を讀みました。愉快です。それから童話劇も出して下さい。中島先生の對話もおもしろいと思ひます。僕は何でも對話みたいなものがすきです。（ファン）

△金の船もとう〳〵第四卷になりましたね。およろこびを申します。ほんたうに早いですこと、そしてなんといふ發達でせう。びつくりする。ほどですわ。まるで記事が充實してまゐりましたものね。（千草子）

△私は「金の船」のうちで樣方と幼年詩を愛讀いたします。一番子供の氣分が出て氣持がよろしうございます。（まゆみ）

△金の船が愈〻よくなつて行くので、非常に嬉しく思つてゐます。記者先生此の後も大いに奮闘なさつて下さい。正月號はみな面白く讀みました。（岡山　うさぎ）

△記者先生私達子供が主になつて作つて居る少雜誌「早苗」をお送りいたしましたから御覽ください。（早苗文學會　藤本榮治）

## 鸚鵡の手帖

▽昨年の十二月二日は天皇の詩人として聞え高き第四皇子澄宮殿下の第六回誕辰に當らせられました。その日殿下には本居長世先生を御前に召され御作童謠の演奏を仰付けられました。

數多き御作童謠の中「月夜の厩」「馬鈴七篇」を本居先生が作曲されて先生の伴奏で、みどり子さんときみ子さんが合唱されました。殿下にはことのほか御滿足に思召され續いて野口雨情先生の「十五夜お月さん」「四丁目の犬」「青い眼の人形」「雞さん」なども演奏されていづれも御滿足のよしに承りました。

▽一月十五日、東京音樂學校で行はれる郁樂會演奏會で、野口雨情先生の童謠で本居先生の作曲されたものを鸚鵡の名手として知られてゐる藤間靜枝女史が振付けをして踊られることになりました。

當日は本居先生のピアノその他琴、三味線、尺八などいづれも當代一流の人々が出演されて見事なことゝ思はれます。なほ藤間靜枝女史の踊られる雨情先生の童謠は「青い眼の人形」「鷄さん」「四丁目の犬」「十五夜お月さん」「數作唄」などで他に「別後」「哀別」などの民謠をも踊られます。

▽「金の船」十二月號の「鸚鵡の手帖」に出ました「小羊の群」は「小羊の群」の誤です。小羊の群といふ名は詩篇の二十三篇からとつたのです。私共はかう呼びます。（木貞恵二郎）



## 編輯だより

▽毎日々々厚い氷がはります。お變りはありませんか。記者一同大に元氣です。

▽さて、皆さんは、丁度この雜誌の出る頃は本當のお正月で、さぞ毎日樂しく遊んでおいでゝせうね。「金の船」の忠犬双六をやつて下さいました。双六のたよりを下さいましね。浮でに皆さんの茶目振りのたよりも下さいね。おつと少し言ひ過ぎましたね。御免なさい。

▽二月號は御覽の通り面白い讀物ばかりで一ぱい埋めました。それから沖野先生の長篇小說「父戀し」もいよ〳〵今月から出ました。今度は立派な本になりますから毎號大切にためて下さい。十二月までつゞきます。

▽三月號の評判記を一すこゝに書きませう。三月は目新しい讀物が大分に入ります。先づおなじみの先生のでは沖野先生が昔小學校の先生をしてゐた頃、銀時計を買ひたい〳〵と思つてゐたので、大サギにあふといふ事實物語の滑稽物がのります。それから楠山先生は今度は少し方面を變へて西洋の歴史物から筋をとつた大英雄ハンニバルの少年時代の物語を書かれます。非にさぞ面白いことでせう。

▽また窪田先生は日本の少年少女に最も興味深い源義經の生立ちを書かれます。それから外中島孤島先生が三月にちなんで書かれた童謠劇「桃のお節句」霜田先生の「少女哀話」宮島先生の支那の「不思議な童話」齋藤先生の「梶若丸物語」の悲しい話その他澤山のります。（記者）

# ◈『金の船』童話講演部新設◈

■『金の船』は大正十一年度新事業の第一歩として今回童話講演部を新設致しました。

■講師はお子供さん達に親みの深い沖野岩三郎先生です。

■講演は先生の、お仕事の都合上、毎月十五日から廿五日までの間に制限いたします。

■子供さん達の爲に、先生の講演をお望みなさる時は、東京市外田端三五一『金の船』編輯所へ宛て御申込下さい。

■講師に對しては、市内ならば車代、市外ならば往復旅費、宿泊を要する時は其の宿泊料等を依頼者から御支辨下さい。

「金の船」編輯部



■私は大正十一年の一ケ年を、毎月十五日から二十五日までの間、子供さん達の爲に奉仕したいと思ひます。

■子供さん達の爲の會合なら、どんな所へでも、出來るだけ都合をつけて參ります。但し私以外に講師がある場合は御斷り致します。尤も子供さん達の面白い催物は是非あつていゝと思ひます。

■私の講演を御希望のお方は、毎月十五日以前に、東京市外田端三五一、『金の船』編輯所宛に御申込下さい。

沖野岩三郎

# 懸賞創作募集

◇少年少女の創作◇

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕題題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなふうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、なるべく學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないようにしてください。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）にかいてください。よく出來た方には『金の船』特製の賞品を差上げます。次號締切は一月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

◇一般讀者の創作◇

童話……齋藤佐次郎先生選
童謠……野口雨情先生選

〔注意〕童話は二十字詰二百行以内、童謠は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ、特選の場合は童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は、「金の船」賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を明記して下さい。


定價　壹冊　參拾錢　送料壹錢
三ケ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊（送料共）參圓六拾錢
但し新年號、四月號、九月號は特別號で冊五錢ですから、御註文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京參〇五七貳番

（注意）
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年一月六日印刷納本（毎月一回）
大正十一年二月一日發行（一日發行）

編輯人　東京府下田端三百五十一番地　齋藤佐次郎
發行人　東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地　山崎寿
印刷人　東京市小石川区久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川区久堅町百八番地　株式會社博文館印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目廿五
發行所　キンノツノ社
電話九段二七五二番
編輯部　東京市外田端三百五十一番地
『金の船』編輯部
電話小石川五三八七



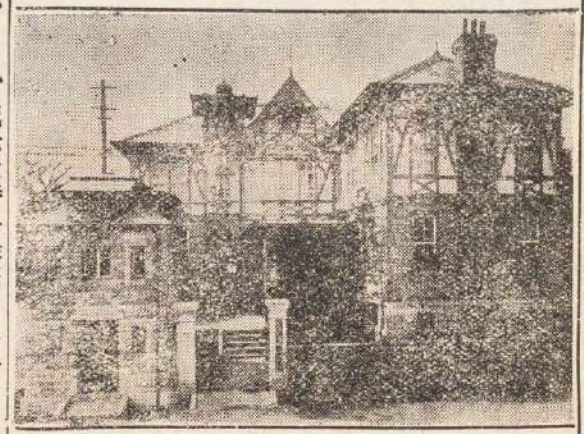


天下の少年は何故に爭ふて大日本國民中學會に入會する乎

講義が新いから
會費が廉いから
指導が良いから
學制が正いから
基礎が固いから
講師が善いから
卒業が早いから
成功が慥だから

會長　尾崎行雄

學監　文學博士　理學博士　藤廉　山内繁雄
顧問　新渡戸博士　三宅博士　井上博士　澤田博士　岡山龍文務大臣



一人前の男となるにはどうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチャンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京神河邊（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇　電話　神田三〇〇二　神田三〇〇三　神田三〇〇四

◉創立以來二十年記念大特典提供
目下新學期開講入會の絶好機
講義錄見本つき　祝則書無料進呈


'83版復刻出版ふるさと

# 少女界

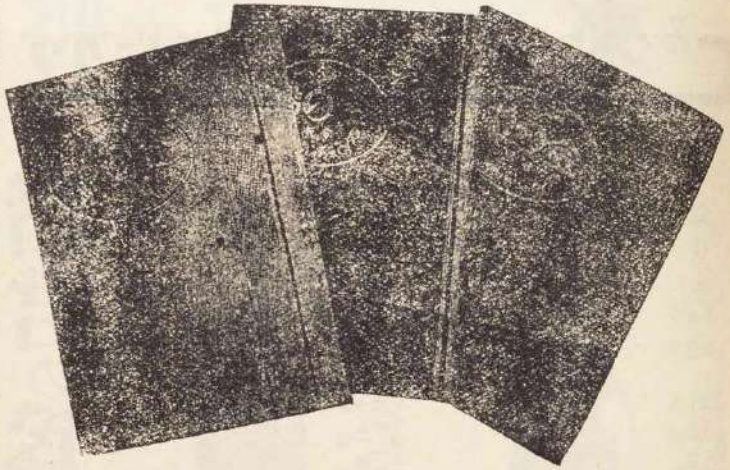
## お姉様へ愛する妹へ少女界二月號


少女童話 男の姿を假りて……馬場孤蝶
▽曲讃 よろこび……中山晋平
▽少女小說 福壽草……大江夕月
▽少女詩 ひとみ……横山美智子
▽映畫ローマンス まごころ……谷光之助
少女小說 第二の母……山田邦子
▽滑稽繪話 犬のアザ……武谷芳穂
▽傳說物語 かぐや姫……原義孝
少女小說 一絃琴のひゞき……横山美智子
▽少女童話 ナンの幸福……廣田花崖
▽少女の印象……小松多美
▽少女小說 名もなき花……最上愛雄
▽ささらぎの思出……横山美智子
冒險少女小說 暗室の秘密……水上孤島



定價壹冊壹圓半 料共壹圓一錢
送料十錢 年分十八錢
發行所 東京麹町 キンノツノ社
振替東京三〇五〇番 電話飯田町六九二七二五番



## 美しき「金の船」の合本

春は來たれり。諸君の机上に、書架の上に、總クロース金文字入の美しき「金の船」の合本を飾られよ。童話に、童謠に、曲譜に、繪畫に、限りなく諸君の清興は湧かむ。

**第一輯**
第一卷初號より第二卷五號まで
七冊合本　定價一圓八十五錢

**第二輯**
第二卷六號より第二卷十二號まで
七冊合本　定價二圓十五錢

**第三輯**
第三卷一號より第三卷六號まで
六冊合本　定價一圓九十錢

**第四輯**
第三卷七號より第三卷十二號まで
六冊合本　定價一圓九十錢

（同時に三輯以上御註文の方へは割引を致します。御註文は、麹町九段下キンノツノ社又は東京市外田端三五一「金の船」編輯所へ宛て願ひます）

# 將に來るシーズン

## 諸君の爲代理部の開設

□好評嘖々たる

□賞讃の的となれる

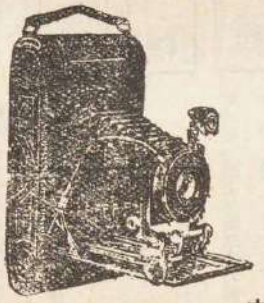
□素人向きのカメラ□

マンドリン

定價表
A 號 九圓五十錢
B 號 十二圓八十錢
C 號 二十一圓三十錢
その他五十圓まで

ヴアイオリン

定價表
壹號 九圓五十錢
貳號 十二圓八十錢
參號 二十一圓三十錢
その他七十五圓まで



定價表
十二圓
十八圓
廿二圓
廿六圓
三十二圓
五十三圓
七十五圓

値段其他の御希望を明細記入の上御注文になれば責任を以て必ず諸君の滿足の出來る品を撰擇します

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよくくわしく書く事。代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

**キンノツノ社代理部**

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

型錄入用の方は貳錢切手二枚要す

# 沖へ行く舟

## 一

暖かい春日に照されながら商造は今度新しく造つた船を一生懸命に塗つてゐました。

砂山の向うにある小松林の所から出て來た二人の子供は、商造の船を見ると直ぐ、

『やア、お父樣のお船ぢや。美しい〳〵。』

と云ひながら、砂の上を小鳥のやうに走つて船の傍へ行きました。

『おう、伊吹子か、明次も來たのか。お父樣はナ、今この船に美しい繪を描いたんぢやよ。そうれ御覽、此所ン所には牛若丸が居るぢやらう。長い刀をさして……』

と云つて商造は刷毛を船縁に措いて腰を伸しました。

『うまく描けましたね。お父樣。この牛若丸は本當に可愛いわよ。』

と伊吹子が言ふと、明次も一緒に、

『上手々々、本當にお父樣は繪が上手ぢやネ。』と褒めました。

『上手ぢやらう？　お父樣はナ、幼い時寺小屋へ行つて、繪ばかり描いてゐてお師匠樣によく叱られたもんぢや。』

商造は、さう云ひながら刷毛で牛若丸の眉の所をちよい〳〵と補筆しました。

『寺小屋ッて、どんな所？』

と伊吹子は不思議さうに訊きました。

『寺小屋ッてのは、今の小學校サ、私らの幼い時は、皆なお寺の和尚樣に讀書を習つたもんぢや。』

『さう？　ではあの善源寺の和尚さまは、お父樣の先生なの？』

『うん、さうぢや。和尚樣は最うやがて七十ぢやが、私等が字を習ひに行く頃はマダ四十二三ぢやッた。それは溫順しい、好い先生ぢやッたよ。』

『私達の日曜學校の先生も好い先生よ。』

『さうぢや、今の日曜學校といふのは、まア昔の寺小屋と同じ事ぢや。』

三人がこんな話をしてゐる所へ、波打際の所から洋服姿の顏の圓い、色の白い、眼のくる〳〵した青年が、ざく〳〵と砂を踏みながら歩いて來ました。

青年は伊吹子と明次の姿を見ると、直ぐにこ〳〵笑ひながら駈け寄つて來て

『伊吹ちやん、明ちやん。濱へ遊びに來たの？』





と云つたが、俯向いて船の底に繪を描いてゐる商造を見た時、默つて一寸挨拶を致しました。

『お父樣。日曜學校の熊田先生よ。』

と伊吹子が言つたので、商造はまた刷毛を船緣に措いて、

『私は此の伊吹子と明次の父親でございます。毎度腕白な子供がお邪魔に上りまして……』

と云つて、丁寧に頭を下げました。

熊田先生は周章てゝ、

『いゝえ、どう致しまして。』と言ひながら帽子をとりました。

其時、明次は熊田の膝の所に凭れるやうにして、

『先生、うちのお父樣は繪が上手だらう？』

と云ひました。すると商造は、

『明坊、何をいふんだい。お父樣は繪が下手ぢやよ。』

と笑ひながら言ひました。

『面白いですネ、こんな新しい船へ繪を描くといふ事は。』

熊田先生は感心したやうに、牛若丸の繪を一心に見詰めてゐました。

商造は熊田先生の言葉を嬉しさうに聞いてゐましたが、

『最う、あの靴の所を少し描けば、それでお終ひにしようと思ふんですが……』

と云つて、また刷毛と繪の具とを持つて身體を屈めました。

伊吹子と明次は熊田先生の兩の手に縋つて、商造の手に持つてゐる刷毛の動き方を見てゐましたが、繪がすつかり出來上つた時、明次は大きな聲で、

『やア、出來た〳〵。』





と言つて手を拍きました。

『本當に綺麗ネ。』と伊吹子も笑ひながら言ひました。

翌る日は日曜だつたので、伊吹子と明次は日曜學校に行つて、お父樣のお船の事を話しました。すると二十人ばかりの子供達が、伊吹子と明次とに案内されて、濱へお船の繪を觀に行きました。

『牛若丸ぢや、牛若丸ぢや。五條の橋の上ぢや。』

『八艘飛びぢや。壇の浦の合戰ぢや。』

『違ふ〳〵鞍馬山の牛若丸ぢや。』

皆なは口々にこんな事を言つてゐますと、小松林の所から、商造と熊田先生とが、話しながら出て來ましたので、

『あ、先生が來た、商造さんも來た。』

と云つて、子供達は思はず手を拍きました。それは商造の肩にながい楫を肩げてゐたから、今にこの船が波の上に浮ぶのだと、思つたからでありました。

『おう、皆さんは、お船を觀に入らしつたのですか。』

と熊田先生は優しく言ひました。

『今ネ、進水式をやるから觀て居ろよ。旨く浮んだら皆なで萬歳を唱へるんだぞ。』

商造は笑ひながらさう云つて、風呂敷包みをお船の中へ靜かに置きました。

そして砂山の上に登つて、

『おうーい、船を下すから、來て手傳つてお呉れ……』

と、呼びました。





聲を聞きつけて、山の方から海の方から、五六人の男がお船の所へ近寄つて來ました。皆な手々に一間ばかりの細い丸太を提げて居ました。

お船は波打際から二十間ばかり上の方の砂の上に置いてありました。

『さア、進水式ぢや。』

と、云つて、色の赭黒い老人は丸太を一間程の間隔に、海の方へ順々に並べました　そして皆なが、

『よいやさの、よい！　よいやさの、よい！』

と、云つて、力を合せて押しますと、お船は苦もなく丸太の上を辷つて波の所まで行きました。

『さア、私が乘るから、皆なで海の中へ押してお呉れ！』

と云つて商造は、ひらりとお船の中に飛込みました。熊田先生も楫を提げて續

いて乗込みました。

『さア進水式だぞ。』

と一人の子供は、小踊りしながら言ひました。

『面白い〳〵！』

と、他の子供達は叫びました。

伊吹子は心配さうに、お父様の顔をちッと見詰めてゐました。

明次は砂の上に蹲つて、繪に描いた牛若丸が今に水の中に沈んで行く時、水を飲んで苦しむのではないかと思ひ乍ら一生懸命にその顔を見てゐました。

『善いか、さア押すぞ！　よいやさの、よい！』

と、老人が言つたので、五六人の若者は皆な、よいやさの、よい！　と聲を合せて、一押ウンと押すと、お船は、スウーと波の上に浮んで、靜かに搖れてゐ





ました。

『あア〳〵、牛若丸の顔が、水の中に沈んぢやッた！』

と、明次が悲しさうに言つたので子供達は皆な一度にワアッ！　と笑ひました。

商造は櫓を押しました。熊田先生は楫を漕ぎました。そして、お船は段々と二町三町五町と沖の方へ出て行つた時、その青や紅の繪の具で塗つた船底が、大きな波に搖られる度に、美しく波の上に現はれましたので、

『美しいネ。』と子供達は感嘆するやうに言ひました。

『あんなに美しく繪を描いて置けば、何處で出會つても直ぐ判つていゝネ。』

と大人の人達も言ひました。

暫くしてお船は岸へ歸つて來ました。商造は熊田先生と二人でお船を濱へ引上げて、

『有難うございました。』

と云つて、皆にお禮を言ひました。

大人の人達は、めい〳〵の仕事場へ歸つて網を乾したり、船底の手入をしたりし初めました。

『おうい、子供さん達、皆な此方へお出で、進水式のお祝ひを上げるから……』

商造は、風呂敷の中からお菓子包みを取出して、子供達にわけてあげました。

それから三日目でした。商造は釣道具を用意して沖へお魚を釣りに出かけるといつて、朝夙く家を出ました。伊吹子と明次が濱へ行つた時は、もう美しい繪の具で塗つたお船は濱邊に見えませんでした。

『お父さま……』





と明次は小い口を、有りッたけ開いて呼びました。

『牛若丸のお船さん……』

と、伊吹子は砂山の上から呼びました。するとその聲が沖まで聞えたかのやうに、東の方の黑い岬の鼻の所から美しいお船が波に搖られて、靜にこちらの方へ漕がれて來ました。

『來た〳〵〳〵！　お父さま〳〵お船が來た！』

と、明次は小躍りして手を拍きました。

『お父さま！　私もそのお船に乘せて下さーい……』

と、伊吹子は呼び續けました。

お船の中ではお父樣の姿が、お人形のやうに小く見えました。漕いでゐる櫓の先の方が、時々キラ〳〵と光りました。牛若丸の顏も太刀も見えませんが、

全體が青うく見えました。

『お父さま……お父さま……』

と二人は呼び續けたが、その聲は波の音に隔てられて聞えないと見え、お船は段々遠くへ出て行つてしまひました。

『伊吹ちやアん、明ちやアん……』

と呼ぶ聲に驚いて振向いて見ますと、おッ母さんの式江が松の木蔭から濱の方へ歩いて來ました。

『おッ母さん、お父樣の美しいお船は最う見えないのよ。』

と伊吹子が言ひますと、明次も、賢さうな眼をくる〳〵させながら、

『今ネ、あの山の所まで來たんだよ。』

と云ひました。





『あア、さう？　お父樣はネ。お日樣が、あの山の向うへ入る頃には、きつと歸つて來ますから……』

お母ア樣は西の高い峰を指さしながら言ひました。

『僕、その時また此所までお迎へに來るよ。』

と明次は、おッ母さんの前垂を引張りながら言ひますと、おッ母さんは、可愛くて堪らないやうに、明次を抱きあげて、その赤い林檎のやうな頰ッぺたに輕く吻を捺しつけました。

『私もお迎へに來るの……』

と伊吹子も、おッ母さんの袂に縋りました。

『さア、歸りませう。おッ母さんはネ、あんた方が、御飯も食べないで出て行つたので、何所へ行つたのか知らと思つて、大へん心配したのよ。』

おッ母さんは然う言ひながら、二人をつれて松原から家の方へ歸つて行きました。松原を畑の方へ出離れて、もう海の見えなくなる時、明次は思ひ出したやうに、大きな聲で、

『お父樣、行つてらッしやい！』と呼びました。それは其聲が遠い〳〵沖に居る、お父樣の所まで聞えると信じてゐたからであります。

『先アヽ明ちやん、お船は見えもしないのに……可笑しいのネ。』

と伊吹子は笑ひました。

『見えなくッても、お父樣はきつとあの海の上に居るんだもの、ねえ、おッ母さん！』と明次は不平らしく言ひました。

『さうだ、さうだ、見えなくとも居るんだネ。』

とおッ母さんは、さう云つて、また明次の頬の所に輕く吻を當てました。




新刊神話傳說童話一百篇國民的說話集の完成！

楠山正雄氏編

日本童話寶玉集

岡本早川兩畫伯
裝幀及畫入

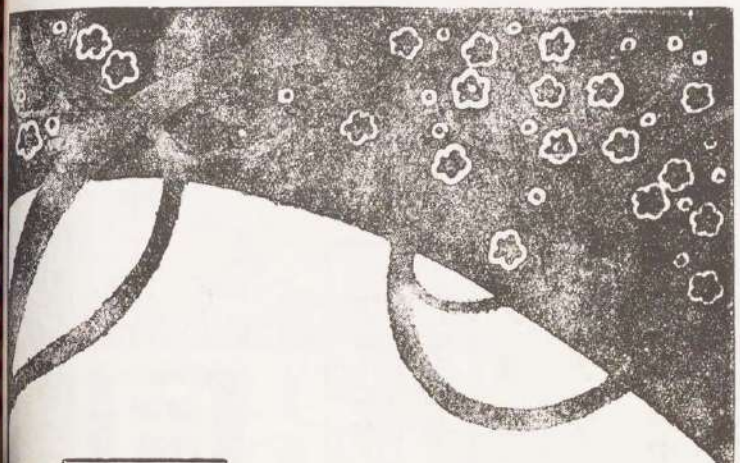
定價各參圓八拾錢
（郵稅各拾八錢）

日本一の美しい本で御子樣達に眞實愛讀される面白い模範家庭文庫

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 アラビヤンナイト 上 | 2 アラビヤンナイト 下 | 3 グリムお伽噺 全 | 4 イソップ物語 全 | 5 アンデルセンお伽噺 全 | 6 ロビンソン漂流記 全 |
| 7 世界童話寶玉集 全 | 8 新譯西遊記 全 | 9 ガリヴアー巡島記 全 | 10 ★★★ 上 | 11 日本童話寶玉集（新刊）下 | 12 聖書物語（續刊） |

發行所 東京神田 合資會社 冨山房 振替一〇五 全國書店 捌賣

大正八年十月十六日　大正十一年一月六日印　朝　鮮　本
（第三種郵便物認可）　大正十一年二月一日發行（毎月一回一日發行）

雛人形陳列

二月一日は棚卸で休業致しますが二日より雛人形を澤山陳列致します何卒お誘合されお出を願ます

二月二日より

◆三越の二月◆

◆栗原氏水彩畫展覽會（四日より）
◆全國水産陳列會（同）
◆帶側陳列（十一日より）
◆日本版畫創作協會展覽會（十三日より）
◆春向友禪陳列（二十日より）

定休日……十日……二十五日

越

東京市駿河町　三越呉服店


東京　キンノツノ社　發行